

TESK ライブラリー 9
2014年3月

大学共創プロジェクト 2013 報告書

金 沢 大 学 大学教育開発・支援センター
富 山 大 学 大学教育支援センター
福 井 大 学 高等教育推進センター
北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター
林 透・河島 広幸 編

目 次

I	はじめに	5
	大学共創プロジェクト 2013 メンバー一覧	6
II	活動報告	
	北陸地区国立大学連携プロジェクト（大学共創プロジェクト） 「大学間連携による人材育成プログラムの共創」の事業計画について	9
	他大学等事例調査レポート	11
	■資料	
	「学生FD サミット 2014 春 参加」	
	「富山大学 UD トークの取組」	
	「山口大学 共育ワークショップ 2013」	
	「兵庫大学の地域との大学づくりを目指した熟議」	
	「京都産業大学の燦 presents『京産共創』プロジェクト」	
	「徳島大学の学生参画型FD ” 繋ぎ create ” の取組」	
III	大学共創フォーラム 2013 「みんなで大学教育について語ろう！Part2」	
	開会の挨拶・趣旨説明	31
	第一部 基調講演	
	「学びのためのカリキュラムと授業づくり」	32
	本所 恵（金沢大学人間社会学域学校教育学類 准教授）	
	第二部 グループワーク	
	「みんなでシラバスを作成してみよう！ ～授業デザインの共創～」	38
	クロージング・閉会の挨拶	49
	■資料	
	「学びのためのカリキュラムと授業づくり」（本所 恵）	
	「大学共創フォーラム 2013 概要資料」（林 透・河島広幸）	
	「大学共創フォーラム 2013 グループワーク用参照資料」（河島広幸）	
	「自己紹介シート」「シラバス（作業用）」「シラバス（発表用）」	
	「グループワーク発表シラバス」（参加者一同）	
	■アンケート調査結果	
IV	おわりに	
	大学共創宣言	81
	編集後記	82

I

はじめに

はじめに

林 透（北陸先端科学技術大学院大学
大学院教育イニシアティブセンター客員准教授）

平成 23～24 年度にかけて、大学組織力向上のための共創プログラムの開発に向けた取組を進めてきた。平成 23 年度には、教員と職員による共創を目指して、大学に関わる幅広い事象のうち、教員と職員が共に営むことが多く、本プロジェクトメンバーとの関係性の高い「教育企画、教務・学生支援」に焦点を当て、アクションリサーチの方法を適用して調査研究に取り組んだ。平成 24 年度には、教員・職員・学生による共創へと発展させ、知識創造技法を活用したグループワークを行い、大学教育において育成すべき人材像について理解を深める場を提供することに成功した。この 2 年間の取組は、各大学の教員・職員・学生がチームを形成し、かつ、地域の 4 大学が組織を超えてチームを形成するに至った。このような実績を通して、共創の定義を「①教員・職員・学生が、協働という形式を超えて、共に大学教育を創り上げるということ」、②大学間連携により、個々の組織文化を超えて、大学教育に関する共通の課題について考え、課題解決や新たな方向性を見出していくこと」とした。

近年、共創というコンセプトは、全国各地で取り上げられるようになり、特に、高等教育界においても京都産業大学の「燦 presents『京産共創』プロジェクト」や大学マネジメント研究会（会長：本間政雄 学校法人梅光学院理事長（元 京都大学理事・副学長））の「共創工房」などの取組が盛んとなっている。大学を取り巻く環境が多様化、高度化する中で、職域を超えて対話し、創造する柔軟性と積極性が求められている表れであろう。

今年度からは、これまで築き上げた枠組をさらに発展させ、確実なものとするため、持続的な共創プログラムの開発に向けた研究を新たに進めることとした。共創プログラムの最大の目的は、参加する教員・職員・学生の能力開発・人材育成に貢献することにある。これまで開発してきたアクションリサーチや知識創造技法によるグループワークは、大学構成員間の共通意識を高めるだけでなく、参加者個々に対する経験学習の機会として重要な要素を備えている。

本プロジェクトでは、これまで力点をおいてきたインプット要素（共創プログラムの設計や“場”の提供）に終始することなく、波及効果を高めながら、共創プログラムにより育成される能力を特定するアウトカム要素を重視した取組を進めたいと考えている。

大学は自らの個性を尊重しつつ、地域との関係において一定の役割と機能を果たさなければならぬ。地域に息づく大学の構成員は、お互いの知見を持ち寄り、ステークホルダーとの対話を試みながら、その役割を創造していくことが大切である。各大学の個性を尊重しながら、教育研究活動や学生生活における日常的な場面を題材とし、我々大学人が大学をより良くするために可能な限りの貢献を進めていきたい。

大学共創プロジェクト 2013 メンバー一覧

平成 25～26 年度北陸地区国立大学学術研究連携支援事業

研究グループ名：「大学間連携による人材育成プログラムの共創」

●金沢大学

大学教育開発・支援センター長（教授）

西山 宣昭

大学教育開発・支援センター教授

青野 透

（研究協力者）学生部学務課教務係長

作田 浩一

（学生委員）人間社会環境研究科人文学専攻博士前期課程 1 年

新堀 文章

（学生委員）人間社会学域人文学類 2 年

大津 諒

●富山大学

大学教育支援センター副センター長（人文学部教授）

佐藤 裕

大学教育支援センター教授

橋本 勝

（研究協力者）学務部学務グループ学務企画チーム主任

横山 雅彦

（研究協力者）学務部学務グループ学務企画チーム事務職員

塩沢 直也

（学生委員）人文学部 2 年

藤田 昂平

（学生委員）理学部 1 年

三田村耕平

●福井大学

高等教育推進センター長（理事・副学長）

寺岡 英男

高等教育推進センター（工学部教授）

飛田 英孝

（研究協力者）学務部教務課教務企画係長

松原 弘尚

（学生委員）工学部 4 年

国枝 賢治

（学生委員）教育地域科学部 3 年

大木 怜

●北陸先端科学技術大学院大学

大学院教育イニシアティブセンター長（情報科学研究科教授）

浅野 哲夫

大学院教育イニシアティブセンター客員准教授

林 透

（学生委員）知識科学研究科知識科学専攻博士前期課程 2 年

河島 広幸

II

活動報告

北陸地区 4 大学プロジェクト(大学共創プロジェクト)

「大学間連携による人材育成プログラムの共創」の事業計画について

【平成 25 年度活動計画】

申請書テーマ：「大学間連携による人材育成プログラムの共創」

【活動方針案】

これまで 2 年間の活動を省察しながら、特に、昨年度の大学共創フォーラム 2012 での成果を基礎にしながら、他大学事例調査を行い、他大学で見られる「共創」に関連する取組の成果やその測定方法について情報収集する。また、昨年度開催した『大学共創フォーラム 2012』での成果物（今、求められる人材像）に基づき、当該人材を育成するための授業デザインをテーマにした『大学共創フォーラム 2013』を開催する。

最終的に、他大学の取組、本研究グループの取組など様々な事例から、「共創」を通じた教職員・学生に対する学習効果を明文化する方向性を探りたい。

(1) 他大学事例調査

各大学の研究グループメンバーを中心に、訪問日程を調整し、他大学事例調査を行う。

主な調査項目として、「①教員・職員・学生協働の目的・内容の把握」「②協働の効用、ファシリテーターの具体」「③アンケート調査などから見られる傾向分析」「④協働活動に関する当事者の見解」などが考えられる。

事例調査対象は以下の通りである。

- 「富山大の UD トークの展開」の事例紹介
- 「山口大の共育ワークショップ実施」の事例調査
- 「徳島大の学生参画型 FD の効果測定」の事例調査
- 「京都産業大の燦 presents『京産共創』プロジェクト」の事例調査
- 「兵庫大の地域との大学づくりを目指した熟議の効果測定」の事例調査

(2) 大学共創フォーラム 2013 企画

テーマ：「みんなで大学教育について語ろう Part2！－授業デザインの共創－（仮題）」

趣 旨：『大学共創フォーラム 2012』における成果物（今、求められる人材像）を活用して、当該人材を育成するための授業デザインをワークショップ形式で取り組む。多様な参加者による新たな授業の共創を楽しみながら、大学関係者が授業デザインやカリキュラムデザインに関する理解を共有し、高めることを目的とする。

主 催：大学共創プロジェクト

共 催：大学コンソーシアム石川，大学行政管理学会中部・北陸地区研究会（予定）

日 時：12 月に予定

場 所：金沢学生のまち市民交流館

対 象：大学教職員，大学生・大学院生，一般の方

定 員：40～50 名程度

構成案：基調講演（授業デザイン，カリキュラムデザインに関する演題）

グループワーク

全体発表・総括

(3) 海外の学生参画研究動向に関する情報収集

金沢大学 大学教育開発・支援センターの堀井祐介教授が取り組んだ科研費研究などについて情報収集を行い、本研究グループの活動に関する示唆を得る。

(4) 学生 FD サミット 2014 春への参加

学生 FD サミットの参加機関活動紹介の場において、北陸地区国立 4 大学の取組として、これまでの活動内容報告を行うことも考えられる。学生を中心とした交流を通して、新たな知見を得る。

(5) 大学教育学会にて成果報告

大学教育学会において、これまでの成果報告を行うとともに、フロアーとの情報交流を通して、今後の活動に対する示唆を得る。

他大学等事例調査レポート

■資料（「学生FDサミット2014春 参加」）

学生FDサミット2014春

大学共創プロジェクト

大学間連携による人材育成プログラムの共創

I. 北陸地区国立4大学連携

金沢大学、福井大学、富山大学、北陸先端科学技術大学院大学

大学共創プロジェクトは、北陸地区国立大学学術研究連携事業の取組です！

II. 大学共創フォーラム

大学共創フォーラムでは、知識創造の技法を援用したグループ・ワークを行い、全体発表を通して共有をしました。

本年度は「みんなでシラバスをつくろう！」をテーマにして、教員、職員、学生、そして、地域の方が熱い議論を交わしました。

本フォーラムでは、多くの魅力的な授業とその計画が発表されました。



授業名	授業のテーマ	学習目標
あなたのためになる 社会実践演習	<ul style="list-style-type: none"> 活動・体験を通して社会の仕組みを知る。 既存の学問の限界を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題を発見し解決することができる。 効果的な情報収集ができる。 人々と協力しながら楽しむことができる。
Enjoy Campus	<ul style="list-style-type: none"> 学生が主体となって学内のイベントを楽しみながら企画・運営する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のアイデアを説明できる。 積極的に他者と協調することができる。

III. 大学をもっと楽しく、もっと元気に！

★多様、複雑、変化の激しい状況に対応するための教員、職員、学生による共創。

★大学間連携を強化するための共創。

★「大学づくり」のための能力開発と新しい人材を共創。



大学名：金沢大学 大学教育開発・支援センター，富山大学 大学教育支援センター，福井大学 高等教育推進センター，北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター

グループ名：大学共創プロジェクト

活動の理念と目標：

大学共創プロジェクトでは，下記の「大学共創宣言」に基づき大学（大学教育）のデベロップメントと，大学人のエンパワーメントを主眼に置いて，研究会と「大学共創フォーラム」を開催している。

「大学共創宣言」

大学（大学教育）は，知のオアシスであり，社会の羅針盤であってほしい。大学（大学教育）が秘めるポテンシャルは計り知れず，そのポテンシャルを感じ取るには，教員・職員・学生（教職学），さらに市民が一緒になって議論する「共創の場」が必要ではないか。我々，大学共創プロジェクトでは，共創の定義を以下のように規定したい。

- ① 教員・職員・学生が，協働という形式を超えて，大学教育を共に創り上げるということ。
- ② 大学間連携により，個々の組織文化を超えて，大学教育に関する共通の課題について考え，課題解決や新たな方向性を見出していくこと。

大学内での位置づけ：

「北陸地区国立大学学術研究連携事業に関する協定書」に基づき，金沢大学，富山大学，福井大学及び北陸先端科学技術大学院大学により，大学間連携事業と認められ，支援を受ける北陸地区国立大学学術研究連携事業支援採択グループ¹である。

これまでの活動内容と成果：

平成 23～24 年度にかけて，大学組織力向上のための共創プログラムの開発に向けた取組を進めてきた。平成 23 年度には，教員と職員による共創を目指して，大学に関わる幅広い事象のうち，教員と職員が共に営むことが多く，本プロジェクトメンバーとの関係性の高い「教育企画，教務・学生支援」に焦点を当て，アクションリサーチの方法を適用して調査研究に取り組んだ。平成 24 年度には，教員・職員・学生による共創へと発展させ，知識創造技法を活用したグループワークを行い，大学教育において育成すべき人材像について理解を深める場を提供することに成功した。

現在の課題と今後の展望：

4 大学間の物理的な距離や組織文化を超えた連携の強化と進化が目下の課題となっている。今後の展望としては，学生メンバーの組織化とそれともなう学生企画の充実化，あるいは地域の市民グループなどと連携した COC（Center of Community）としての大学の共創を検討している。

連絡先・URL：

北陸先端科学技術大学院大学 客員准教授 林 透 (h-tooru@jaist.ac.jp)
博士前期課程 M2 河島広幸 (2kawashima@gmail.com)

¹ 平成 25 年度は，「大学間連携による人材育成プログラムの共創」というグループ名で採択されている。

■資料（「富山大学 UD トークの取組」）

学生企画

第3回 UD トーク 2013 秋

—大学での学びについて考えよう—

UDトークとは??

大学での教育の在り方について、学生・教員・職員・市民が率直に語り合う場、議論し合う場！

普段の生活の中ではなかなか話すことのないテーマについて直接話す機会の少ない立場の違う人と意見を出し合うことで大学での学びの在り方について考え直したり、考え続けたりするきっかけになることを願って開催するイベント！

2013年11月24日(日)13:30~16:30

富山大学五福キャンパス 共通教育棟

第3回UDトーク実行委員会

第3回UDトーク 実施報告

実施日時 11月24日(日) 13:30~16:30

開催場所 五福キャンパス共通教育棟C11教室ほか6教室

参加者 学生49名(うち3名は運営のみ参加)

学部別：人文…8名、人発…3名、経済…4名、理…9名、工…25名

学年別：1年…35名、2年…9名、3年…3名、4年…2名

教員9名(学長、山口副学長、人文1名、人発2名、経済2名、理1名、センター1名)

職員3名(学務部2名、総務部1名)

市民1名(話題提供者)

他大学教員3名(岡山大学、明治大学、関西大学)

総計 66名

~~~~~

UDトーク実行委員会メンバー：理学部1年 後藤大貴(実行委員長)

経済学部1年 内田実奈(副委員長)

理学部1年 大上峻史

支援メンバー(UD Mates)：人間発達科学部3年 井上裕也、加賀見尚子、2年 久保卓也、文原慎喜

人文学部3年 米屋保雄、2年 藤田昂平

理学部1年 三田村耕平、軽尾浩晃

教員支援メンバー：理学部教授 渡邊了

人間発達科学部准教授 久保田真功

大学教育支援センター教授 橋本勝

~~~~~

●参加者アンケート集計結果の概要

教職員・一般市民・他大学教員・受講生以外の学生分 …17名

橋本の授業の受講生分 …36名 計53名分

Q1. 今回のUDトークの満足度は次の内、どれですか。

1. 満足 2. どちらかと言えば満足 3. どちらかと言えば不満 4. 不満

1. 21 (39.6%) 2. 26 (49.1%)

3. 5 (9.4%) 4. 1 (1.9%)

Q2. 今回のトークテーマについてどう思いましたか。

1. 話しやすかった 2. どちらかと言えば話しやすかった

3. どちらかと言えば話しにくかった 4. 話しにくかった

1. 16 (30.2%) 2. 19 (35.8%)

3. 13 (24.5%) 4. 4 (7.5%) 無回答1

※学内の委員会用にまとめたQ1やQ2の理由や今後のUDトークで話し合いたいテーマに関する自由記述をまとめたものもありますが、今回の資料では省略。

参考:事前の案内

第3回UDトーク

UD:University Development…教職員だけではなく構成員としての学生や関心を持つ一般市民を巻き込んでみんなで大学教育の改善・充実・深化・発展を推進しようという富山大学発の新たなFDムーブメント。UDトークはその中心的イベントで、数人のグループに分かれて学生と教職員等が気軽に話し合ったり協働で何かを作り上げたりしながら相互理解を深め、学生の知的成長を目指すものです。

《教職員・一般市民用 概要説明》

- 日時: 11月24日(日) 13:30~16:30 (時間は仮予定)
- 場所: 共通教育棟 各教室 (受付はA棟1Fロビー)

※このイベントは学生企画のものですが、UDという考え方に賛同して頂ける教職員や一般市民の参加を歓迎します。学生たちの大学での学びがより充実したものになるよう、それぞれのお立場から学生たちとフランクに話し合い、学生たちとの協働作業を通じて楽しいひと時をお過ごしになりませんか。

※今回は参加者の多数を占める学生たち自身に「大学での学びのありがたさ」を見つめ直してもらおうという内容ですが、教職員・市民の皆さんには学生が自分をしっかり見つめ直せるよう、それぞれの立場から御助言頂ければ幸いです。但し、学生たちと直接語り合うことでジェネレーションギャップを埋め、知的刺激を得られることも十分期待されます。

当日のプログラム(案)

※6月9日に開催した第2回UDトークと同様、フレッシュな感覚を活かすとともに本人たちの知的成長に役立てる目的で、取って不慣れな1年生の一般学生に企画・運営を任せ、UD Mates *メンバーが支援する体制で準備を進めている関係でギリギリまで内容が固まりきらず現時点ではまだプログラム内容は全く煮詰まっていません。御了承下さい。

*UD Mates: 大学教育支援センターの協力の下、UD活動を日常的に進めている富山大学独自の学生中心組織。週1回大学教育問題等を活発に議論したり、全国の学生FD活動を展開中の仲間と交流したりしている。

- 13:00~13:30 受付
- 13:30~13:40 オープニング
- 13:40~14:00 話題提供…島田勝彰氏 (AtionOne 代表)

「富山の10年後を design する」を合言葉に学生と地域・企業等を結びつける活動を通じ、大学教育を補うような能力開発・人材育成を積極的に展開している青年実業家。

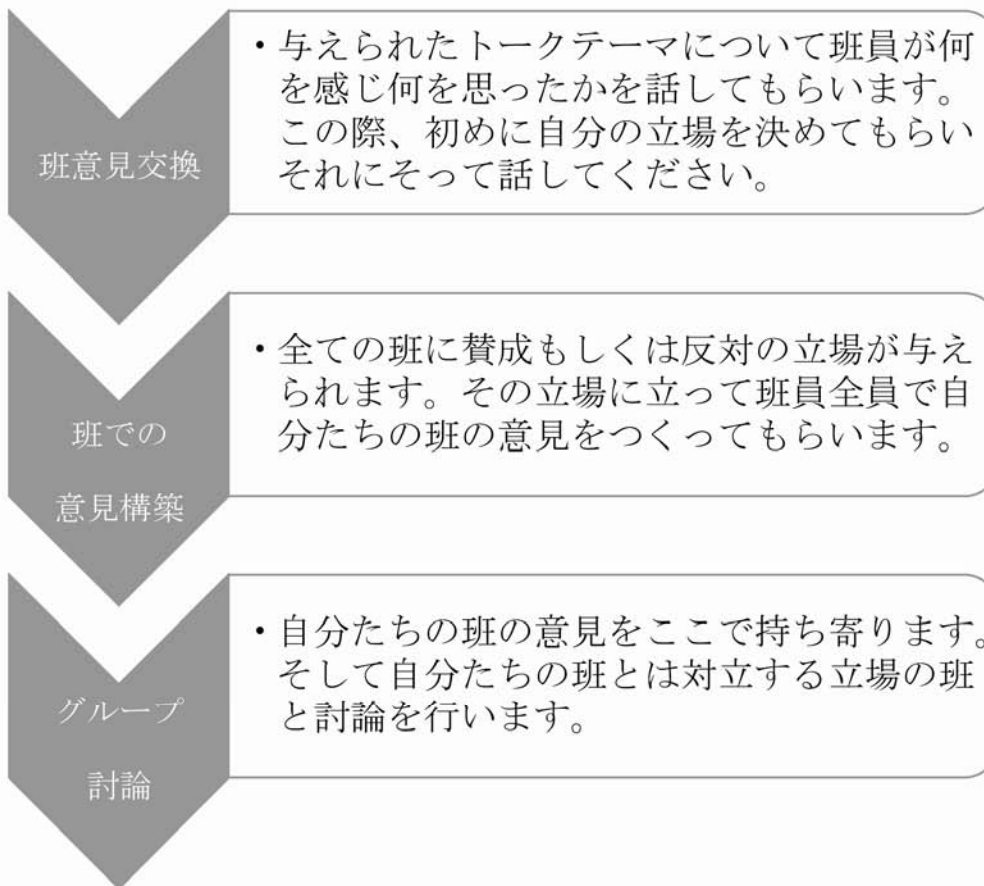
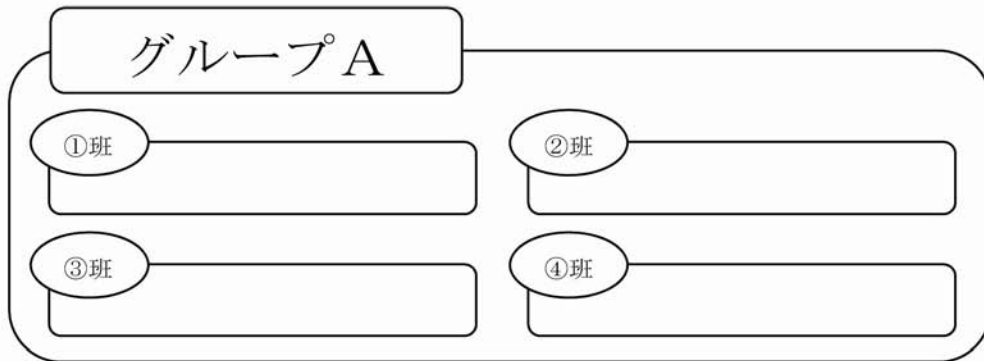
本学の人間発達科学部卒業のOBという面と2013年3月までは本学職員だった面を併せ持つ。今年度前期に人間発達科学部での非常勤講師も1回分担当。

- 14:00~14:10 移動
- 14:10~16:10 グループトーク (内容・形式未定)
- 16:10~16:15 移動
- 16:15~16:30 クロージング (アンケート記入を含む)

- 各グループにはファシリテーターが1名配置されますが、グループによっては、不慣れな1年生が担当します。教職員・一般の参加者には是非、その補助役をお願いします。参加する学生たちが自由に発言しやすい雰囲気づくりに御配慮下さい。
- オープニングセレモニー後は各教室に分かれてグループ単位での話し合いや作業になります。「一期一会」の精神で貴重な時を共有するとともに、若い感性に触れて、自らの活力として下されば幸いです。

問い合わせ・申し込み先: vhashi@ctg.u-toyama.ac.jp (橋本 勝:大学教育支援センター 教授/FD部門長)

討論の流れ



■資料（「山口大学 共育ワークショップ 2013」）

創基 200 周年記念イベント

共育ワークショップ 2013 「みんなで山大の教育（共育）について語ろう！」 参加報告

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科 博士前期課程 2 年
河島 広幸

1. はじめに

2013 年 9 月 24 日、山口大学にて、創基 200 周年記念イベント・共育ワークショップ 2013「みんなで山大の教育（共育）について語ろう！」（以下、本イベントという）が開催された。同大学の教員、職員、学生合わせて約 80 名の参加があり、全員参加型のグループワークが行われた。報告者は、グループワークの解説役として参加する機会を頂いたので、本イベントへの参与観察を通して得た発見事項を挙げて、「共創」概念の実践について考察し、参加報告書としてまとめる。

2. 「共育」と廣中レポート

山口大学では、2004 年の国立大学法人化に伴い、大学憲章を策定し、当該大学の理念を以下のように定めている。本イベントは、創基 200 周年を記念する意義が込められていることが、その行事名からも読み取ることができ、特に注目すべき点は、共に育むという意味の「共育」を冠したイベントになっていることである。本イベントは、大学教育について議論をするだけでなく、大学の理念にも明示されている共同、共育、共有という「山大スピリット」を涵養する場にもなった。本イベントは、「大学共創フォーラム 2012」でもテーマになった「今、求められる人材像」を教員・職員・学生（三者）が一緒になって描き出すための取り組みであり、「共育の場」を三者が実感できることをねらいとしている。

①「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造

私たち山口大学は、21 世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不断に評価しつつ英知の創造をめざします。

②共同・共育・共有精神の涵養

私たち山口大学は、共に力を合わせ、共に育み合い、共に喜びを分かち合います。この共同・共育・共有の精神を“山大スピリット”として涵養します。

③公正・平等・友愛の尊重

私たち山口大学は、“山大スピリット”による他者への配慮と自らを律する倫理観のもとに、あらゆる偏見と差別を排し、公正と平等と友愛の精神を尊重します。

山口大学の元学長であった廣中平祐氏が中心となってまとめられた、いわゆる廣中レポートには、「正課教育の内容のあり方や授業方法、さらに教育条件の改善などの分野についても、学生の希望や意見を適切に取り入れる仕組みを整備」していくことが主張されており、その精神性が「山大スピリット」にも反映されていると考えられる。現在、徐々に全国に広がりつつある「学生FD（学生参画型FD）」が廣中レポートで主張された考え方に、少なからず影響されていることは、いくつかの書籍や資料からみることができ、「山大スピリット」を実感する場としての本イベントもそういった文脈のなかで捉えることが十分に可能である。共に育むという教育のあり方などについて、三者の考え方（や想い）を共有し、共同で大学教育の改善に取り組みという本イベントの主旨は、山口大学の理念に合致するものである。廣中レポートとそれに影響を受けた「山大スピリット」は、いわゆる「学生FD」の精神的淵源とも考えられ、「学生FD」という一つの現象を理解するためにも有意義なものであるといえる。



3. ワークショップ

本イベントで行われたワークショップは、「大学共創フォーラム2012」（以下、共創フォーラムという）で行われたものを、山口大学へ適正化されたものであり、「大学共創」の一事例と捉えることが可能である。属性別グループと三者混合グループでワークが行われ、特に後者の方がより活発にアイデアが出され対話が促進されていたように感じた。本イベントのワークショップにおいて、特徴的であったのは、学生の積極性である。時間の関係上、発表できるグループ数が限られていたにもかかわらず、ほぼすべてのグループから発表の希望が出され、発表できないグループでは、発表できない悔しさを学生たちが声にするなど、その積極性は目を見張るものがあった。もちろん、すべてのグループの発表者（発表予定者）は学生であり、発表する権利を勝ち取った学生は、発表テーマや対話の過程などを整然と述べており聴衆側にとっても得るものが多かったことが伺えた。また、本イベント終了後には、教員から「普段はみれな

い学生たちの姿がみれた」, 「学生たちの積極的な態度におどろいた」などの声を聞くことができた。「大学共創フォーラム」と「山口大学共育ワークショップ」で採用しているグループワークが学生たちの積極性を刺激し, 自ら進んで行動することを促すことに寄与していることが見て取ることができ, 今後の「大学共創プロジェクト」にとっても示唆的なイベントであった。



4. おわりに

本イベントでは, 「共創フォーラム」で採用したグループワークを山口大学に合わせて再構築したものを行った。「共創フォーラム」でもみることができた, 学生の積極性は, 本イベントでも十分に確認することができ, グループワークの効果・影響についていっくらかは明らかになってきたのではないかと考えられる。今後も複数回取り組みを重ねて, 他大学でもみることができる「共創」の事例を分析することで, 三者混合によるグループワークの効果・影響, さらに状況に合わせた運用方法などについて明確にすることが可能であるといえる。さらに, 現在においては, その是非を論じるまでもなく, 積極性や主体性つまり, 「自ら進んで行動する」態度や力が求められる人材像のひとつである。本イベントないし共創フォーラムで採用しているグループワークは, そのような態度を学生からみることができ, 機会を提供する場になっていると考えられる。特に重要な点は, そういった態度や力を身に付けるために大学教育はどうあるべきかを三者で共有し, 三者の共同によって形にしていくことではないかと感じた。最後に, 終始良い雰囲気で行っていただいた山口大学の教員・職員・学生の方々と大変に貴重な機会を与えてくださった林透先生ならびに大学共創プロジェクト委員の皆様に感謝申し上げ, おわりにとさせていただきます。



■資料（「兵庫大学の地域との大学づくりを目指した熟議」）

熟議 2013 in 兵庫大学

「加古川地域の未来について話をしよう！ ～世代を超えた熟議～」参加レポート

北陸先端科学技術大学院大学

大学院教育イニシアティブセンター客員准教授

林 透

日 時：平成 25 年 11 月 24 日（日） 13:00～17:30

場 所：兵庫大学 2 号館 1 階 104 教室

内 容：13:00～13:07 開会

13:07～13:15 テーマ等の説明

13:30～14:30 熟議（前半）ワークショップ

14:40～15:40 熟議（後半）ワークショップ

15:40～15:55 まとめ

16:00～16:50 グループごとの発表

16:50～17:20 意見交換

参加者：大学生 16 名，高校生 28 名，一般市民（自治体関係者含む）41 名

【方法】

「熟議 2013 in 兵庫大学」は、「熟慮の段階」「議論の段階」「共有の段階」「振り返りの段階」「活動の段階」の 5 つを基本としている。

「熟慮の段階」は、参加者に事前に郵送される「事前熟慮メモ（1）」「事前熟慮メモ（2）」に回答し、事前学習することを求めている。「事前熟慮メモ（1）」では、①あなたは 20 年後どんな生活を送ってみたいですか、②あなたは普段どういった時に「幸せ」を感じますか、③あなたがお住まいの「ふるさと」自慢をしてください、④あなたは将来どんな「ふるさと」にしたいですか、という 4 つの設問が設けられ、自分の考えを記述することとなっている。「事前熟慮メモ（2）」では、加古川地域（加古川市，高砂市，稲美町，播磨町の 2 市 2 町）の強みと弱みを回答し、同地域の認識を持つこととなっている。この事前学習を踏まえて、熟議の当日を迎える流れとなっている。

高校生の参加者については 20 名を超える参加があり、各高校を訪問して参加をお願いしている。参加した高校生には、熟議を通して、社会人として求められる「能力」（自主性，思考力，実行力，対応力，交渉力，会話力，計画力，規律性，運営力，貢献性の 10 種類）の伸びを 5 段階評価する自己認識シートを配布し、事前・事後に記入をさせて、その変化を測定している。

兵庫大学の学生がグループワークのファシリテーターを務めていたが、該当者には事前研修を施しているとのことであった。

なお、これらの制度設計は、兵庫大学の担当教員の間で企画立案しているとのことであった。

【感想】

2012年に文部科学省が共催して行った熟議を継続して、大学独自で行ったものであるが、高校生を含め、大勢の参加があり、11グループによる熟議は活況を呈していた。

兵庫大学が立地する地元地域をテーマとしていることから、地元にも最も身近である市民や高校生が思いを込めた発言をしていた。特に、長年生活しているシニアの方と高校生の世代間を超えた議論は非常に印象的であった。

最後の全体発表においても、半分以上のグループにおいて、高校生が発表するといった光景が見られ、テーマ設定次第では、高校生を交えた共創の対話の可能性を感じることができ、非常に有意義であった。また、高校生への効果測定のある方についても情報収集することができ、今後の参考としたい。



■資料（「京都産業大学の燦 presents『京産共創』プロジェクト」）

燦 presents「京産共創」プロジェクト 調査報告

福井大学
教育地域科学部 地域科学課程 3年
大木 怜

1. はじめに

2014年2月26日、京都産業大学を拠点に活動する学生FDスタッフ「燦（SAN）」の概要や現在までの活動について拝聴する機会を得た。本報告書は調査を通して発見した事項を挙げながら、燦について考察する。

2. 調査内容

「燦」の前身として2010年に実施した京都産業大学教育支援研究開発センター主催の「第1回学生と教職員が共に考えるFDフォーラム」がある。このフォーラムでは「より良い授業とは？」をテーマとし、学生と教職員間で「よい授業」に対する考え方に違いがあることが明らかとなり、教職員側からの「授業改善には学生からの意見を取り入れる必要があるのではないか」との問題意識によって学生が参画することとなった。参加した学生5名の内、3名が主に学生FDスタッフとして活動していたが、彼らは留学等を理由として活動できなくなり、一時的に活動休止状態となった。その為、2011年に、新たに学生を募集することとなり、結果、16名の学生から応募があり、「燦」として活動を再始動させた。

また、燦の学生のファシリテーションスキルの育成には、ファシリテータマインドの浸透・促進を目的とする京都産業大学キャリア教育研究開発センターF工場の協力を得、ファシリテーションに関する理論と基本的な実践を学んでいる。ちなみに、燦は京都産業大学の「産」と同音であり、また太陽が燦々と輝くように光り輝く大学になってほしいとの願いを込めて、学生によって名付けられた。

燦は「京都産業大学をもっとよくしたい!」との思いから、授業・カリキュラムを、学生の視点から改善するために学生の意見を収集して発信するために様々な活動・イベントを企画・実施している。その中で特に注目しなければならないのは「京産共創」プロジェクトだ。このプロジェクトは「京都産業大学を学生・教員・職員みんなで協力して創っていこう」との思いを込め、①学生・教員・職員の三者が互いの立場を超えて意見交流ができる場の提供をすること、②よりよい京都産業大学を三者が互いに協力し創っていくための契機とすること、③それぞれが考える問題の所在や大学が目指すべき方向性を明らかにし、今後の活動内容を検討することを目的として開催されている。燦が発足した2011年の12月に第1回が行われたのを皮切りに、2014年2月現在で計3回行われている。特に第1回目は最初にも関わらず学生、教職員合わせて104名(内、学生58名)、また藤岡一郎学長が参加するなど、その実施内容には眼を見張る。またフォーラムでは参加者を対象とした質問表「共創シート」を使った調査が行われた。その中で京都産業大学への帰属意識の項目を見ると学生、教員、職員すべての数値が高い。特に職員は4.62と高いが、これは京都産業大学に所属する職員の約6割が京都産業大学の卒業生であり、それが在校生を後輩と思い、彼らの活動に対して積極的に支援する土台となっているのではないかと推察する。また学生の値も比較的高いことや、「京産共創」プロジェクトの「共創」

は学長の就任スピーチで使われていたことを学生FDスタッフが知っていたこと、そして施設見学の際に案内の学生から京都産業大学の詳細について聞いたことから、京都産業大学で行われている「自校教育」も燦をはじめ、多数の学生団体が誕生している原因であると考えられる。

ところでどの団体においても活動を継続するには人手が必要だが、その確保は難しい。燦では部活動やサークルと被らないように募集を6月に、ゴールデンウィーク明け頃と秋学期の始まる頃に「新歓しゃべり場」と題して勧誘を行っている。また先述の『京産共創』プロジェクトなどのイベント・企画に参加した学生がそのままメンバーになることも多々見られる。「新歓しゃべり場」をはじめtwitterやYouTubeを利用するなど、燦は「堅いそうなイメージ」を拭うことに力を注いでいて、現在40人ものメンバーが所属していることからその成果が伺える。またこのような活動に対して一般的には教員の参加は今ひとつとなる傾向があるが、燦が行うイベント・企画には毎回20名ほどの教員が参加しており、中には学生自身が直談判した例もあるという。



ラーニングコモングスの内部



調査風景

3. おわりに

どうしても私が在学している福井大学と比較してしまうが、どこをとっても勝ち目がない。特に(FD活動に限らず)学生の積極的な参加は各方面から「おとなしい」と言われる福井大学生には最も縁のないことだ。今すぐに学生の意識を変えることはほぼ不可能だが、意欲のある学生を巻き込める体制づくりが急務だと考えている。

最後に貴重なお話をお聞かせくださった京都産業大学の山内尚子氏をはじめ、今年4月にオープンするラーニングコモングスや中央図書館などを案内してくださった学生スタッフの皆様とこのような大変貴重な機会を与えてくださった北陸先端科学技術大学院大学の林透先生に感謝申し上げます。

■資料（「徳島大学の学生参画型FD「繋ぎ create」の取組」）

徳島大学 学生参画型FD「繋ぎ create」の取組に関する訪問調査レポート

北陸先端科学技術大学院大学

大学院教育イニシアティブセンター客員准教授

林 透

日 時：平成 26 年 2 月 17 日（月） 14:00～16:00

場 所：徳島大学 常三島キャンパス 共通教育 6 号館

対応者：徳島大学 教育改革推進センター講師 吉田 博

訪問者：岡山大学 教育開発センター助教 遠山 和夫

北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター客員准教授 林 透

【目的】

大学共創プロジェクトの平成 25 年度活動計画に明記した「共創」を通じた教員・職員・学生に対する学習効果に関する検討を進めるに当たり、徳島大学の吉田博先生が著した「学生が参画する教育改善・学生支援活動の効果検証に関する一考察 ―徳島大学学生チーム「繋ぎ create」の事例から―」（大学教育研究ジャーナル第 13 号（2013），pp.9-20）に注目し、訪問調査を通して、具体的な情報収集を行うこととした。訪問調査の目的から、質問項目として以下の 7 項目を用意し、当日、回答いただいた。

- ①教員・職員・学生協働の目的と具体的な取組内容について
- ②学生をどのように組織化し、その組織をどのように維持しているのか。
- ③ファシリテーション・スキルについて、どのように育成しているのか。
- ④協働活動を通して、教員・職員・学生は何を学び、身に付けているのか。
教員・職員・学生の学びや成長において、特徴的な事項や差異が見られるのか。
- ⑤協働活動の効果測定について、どのような点に配慮しているのか。
- ⑥学内における認知度、諸課題について
- ⑦学内だけでなく、県内や四国内での交流活動について

【活動の経緯及び内容】

徳島大学での「繋ぎ create」を中心とした活動は、2010 年 8 月、愛媛大学で開催された SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）フォーラムにおいて、参加学生が正課外活動に関するワークショップで企画したアイデア（学生と教職員の話し合いの場づくり）の実現に端を発している。2010 年 11 月に、第 1 回のしゃべり場が開催された以降、2011 年 2 月、4 月、7 月と矢継早に開催され、2011 年 9 月には、現在の「繋ぎ create」という学生チームが結成されることとなった。これらの活動において、教育担当理事の参加や岡山大学・追手門学院大学・佛教大学等の他大学生との交流を通じた広がりが見られた。2011 年 11 月 3 日、学園祭の時期に開催されたキャンパス・ビジョンでは、11 大学から学生 86 名、教職員 14 名、一般 8 名、計 108 名の大きなイベントとなり、グループワークを通してキャンパスライフ等について対話を行った。

「繋ぎ create」の活動は、教育改革推進センターの吉田先生のパーソナリティや行動力に拠るところが大きい印象を受けるが、関心のある学生がボランティアに集い、学生メンバー間の継続的な繋がりが確保されているように思われる。活動初期には、学内における認知度がなく、かつ、経費的支援が得られない中でかなりの苦労があったようであるが、2012年度からは学長裁量経費の支援を受けて活動が展開され、学内における認知度も高まっていった。2014年4月からは、ピア・サポートグループとして、全学的位置づけが明確化され、活動拠点となる居室の確保が実現するようである。

「繋ぎ create」の取組は、2011年度から順調に展開し、「真剣徳大しゃべり場」、「スタディレスキューWeeeeeK」、「松下村塾 in Tokushima」「一年生限定 これからが本番」「未来が過去になる前に話しておきたい〇〇こと」といった活動を行ってきたが、2013年度頃からは、学生の学習をいかに支援するかといった点に重きを置いた活動にシフトしつつあるように思われる。それに伴い、学生チームについても、しゃべり場などを通じた人と人との繋がりづくりに取り組む「繋ぎ create」のほか、学生中心のニュースレター編集に取り組む「らばっと編集部」、図書館との連携による学習相談等に取り組む「学びサポート企画部」という3チームが役割分担されて編成されるようになっている。

これらの活動を日常的に行っていく中で、メール送信のマナーなど、社会生活上の基礎的知識を植え付けるような教育的配慮がなされているほか、定期的に行われる打合せの議事録作成や研修報告等を学生自らが行う組織的責任性が備わっていることを感じた。また、合宿研修等を通してながら、ファシリテーションに関する基礎的スキルに身に付けさせる機会提供、学生同士がトレーニングする機会設定がなされている。今後の活動においては、学生メンバーに対して活動ポートフォリオのとりまとめも計画しているようである。



【まとめ】

訪問した吉田研究室の壁には、「繋ぎ create」の活動理念「大学生が躍進できる機会を得るために、人と人との繋がりを創り続ける」の文字が掲げられていることが印象的であり、ビジョンの明確化と共有に努めていることに参考とすべき点を強く感じた。個々の取組については、その時々環境によって変化を余儀なくされているようであるが、基本的なコンセプトを大切にしながら、時機に合ったニーズをキャッチして、学内への情報発信を通じた活動の見える化に努めながら活動展開している戦略性の巧みさを感じ取ることができた。

徳島大の取組の特徴は、別に調査した京都産業大学の事例のように、学生・教員・職員を繋ぐということよりも、学生同士が学び合うピア・サポートを重視していることが、活動の経緯や内容等をお聞きして、よく理解することができた。だからこそ、これらの活動を通じた学生への教育的効果を意識した配慮を随所に感じ取ることができた。

Ⅲ

大学共創フォーラム 2013

「みんなで大学教育について 語ろう！Part2 -授業デザインの共創-」

日 時：2013年12月21日（土）12:30～17:00

場 所：金沢学生のまち市民交流館 交流ホール

大学共創フォーラム2013

みんなで大学教育について語ろう！

Part2

—授業デザインの共創—



みんなで創った授業が、
あしたの大学教育を
新しくする。
それが**大学共創**です。
「教える」と「学ぶ」、二つ
の視点から何が見えてく
るでしょうか。

会 場：金沢学生のまち市民交流館 交流ホール
(石川県金沢市片町2-5-17)

《URL》

<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/22050/shiminkouryukan/>

日 時：12月21日(土) 12:30~17:00 (受付開始 12:00)

対 象：大学教職員、大学生・大学院生、一般の方

定 員：40名

主 催：大学共創プロジェクト

金沢大学 大学教育開発・支援センター

富山大学 大学教育支援センター

福井大学 高等教育推進センター

北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター

大学コンソーシアム石川

共 催：大学行政管理学会中部・北陸地区研究会

主催：大学共創プロジェクト(北陸地区4大学プロジェクト)、大学コンソーシアム石川
共催：大学行政管理学会中部・北陸地区研究会
日時：12月21日(土) 12:30～17:00 (受付開始 12:00)
会場：金沢学生のまち市民交流館(石川県金沢市片町2-5-17 TEL: 076-255-0162)
対象：大学教職員、大学生・大学院生、一般の方
定員：40名

趣旨：大学教育について、教員・職員・学生、そして、市民が一緒になって考える共創の場づくりを目指します。「今、求められる人材像」について考えた昨年度に続き、今年度は、教員・職員・学生、そして、市民が一緒になって、授業デザインに取り組みます。新たな授業の共創を楽しみながら、授業デザインやカリキュラムデザインに関する理解を深めることを目的とします。

内容：知識創造の技法を使ったグループワークを通して「シラバス作成」を行います。「教える」と「学ぶ」、二つの歯車を上手にかみ合わせるために、教える側(教員)と学ぶ側(学生)の視点だけではなく、職員や市民の方の意見を取り入れながら、みんなで授業デザインについて考え、シラバスを創り上げます。

当日のスケジュール

- (12:00 受付開始)
12:30 — 開会挨拶・趣旨説明
12:40 — 基調講演「学びのためのカリキュラムと授業づくり」
講師：本所 恵 准教授(金沢大学 人間社会学域 学校教育学類)
(休憩)
13:30 — グループワーク「みんなでシラバスを作成してみよう！ ～授業デザインの共創～」
16:00 — 全体発表・総括
16:55 — 閉会挨拶
17:00 — 閉会
【総合進行：北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター客員准教授 林 透】

※本フォーラム終了後、近隣にて情報交換会を行います。参加希望の方には別途詳細をご連絡いたします。

【お申込み】

申込は、件名「大学共創フォーラム申込」とし、
① 氏名、② 所属機関・職名、③ E-mailアドレス、
④ 情報交換会参加希望の有無、以上の4点を
記入の上、下記アドレス宛に送信願います。
e-mail: murakami@ucon-ijp

【申込締切】

12・6・(金)までとします。ただし、定員となり次第、申込を締め切らせていただきます。

【お問合せ】

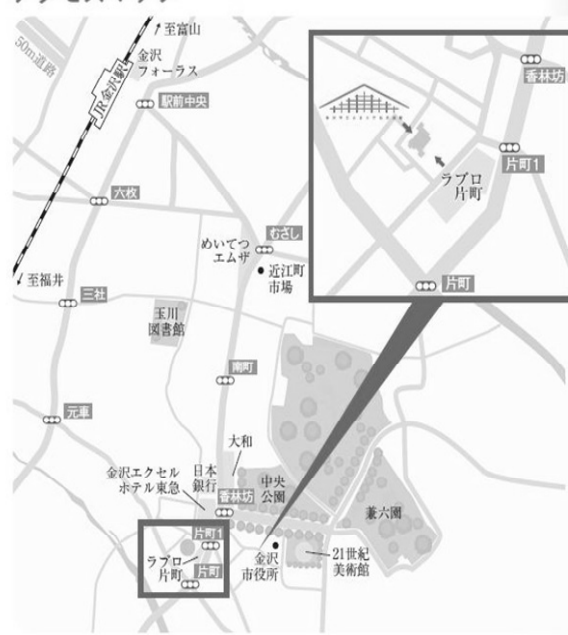
一般社団法人 大学コンソーシアム石川
(担当：村上)

TEL:076-223-1633 e-mail: murakami@ucon-ijp

【会場アクセス】

会場には、右図を参照の上、お越してください。駐車場は、ありませんので、公共交通機関にて来場願います。北鉄バスで「片町」下車徒歩2分、「片町中央通」下車徒歩5分。

アクセスマップ



開会の挨拶・趣旨説明

青野 透 (金沢大学 大学教育開発・支援センター教授)

こんにちは。金沢大学の青野です。今日の私のニックネームは「青次郎」です。先ほどグループの中で「青ちゃんと呼んでほしい」と言ったのですが、青ちゃんは呼びにくいということなので、青次郎でいきます。

最近、教育を変えていこうとするときには「共に創る」ということが一つの方向となっています。例えば、本日、教職員の方に参加いただいている京都産業大学では、既に学生FDとして実際に大学共創委員会がつくられています。どの大学でもそうですが、今まで大学教育はあくまでも教員主導であり、個々の授業は教員のもののみなされてきました。それはもちろんよい面もありました。例えば、大学共創プロジェクトの主催メンバーの一人である富山大学の橋本先生は、独自の授業方法である「橋本メソッド」を開発され、他大学でも取り入れられています。そういう形で私たち教員は一人一人が授業改善を行ってきましたが、それには限界があることも確かです。今は職員や学生と一緒に授業改善を行っていかうとしています。これは法的にも裏付けられていて、FDでは、個人ではなく大学が組織として行う授業内容・方法の改善を行うための研究をするようにと、大学設置基準で義務付けられています。今日こうして行っているのはまさにFDで、組織的に、それも教員一人一人ではなく、みんなでやるものです。しかも、「創」は新しいものをつくるという意味ですので、今日は今まで世界のどの大学にもなかったようなシラバスに基づく科目をみんなでつくっていききたいと思います。

このプロジェクト自体は3年目ですが、昨年もここで、大学が育成すべき様々な人材像について議論が行われました。今年はまだフレッシュなメンバーを迎えていますので、昨年以上のものができればと思っています。また、実際に皆さんが「あの授業をつくれればいいね」と、それぞれのテーブルにいる教員にプレッシャーをかけるような形で終えられたらと思っています。今日はどうぞよろしくお願いします（拍手）。



林客員准教授 ありがとうございます。なお、このフォーラムは昨年同様、大学コンソーシアム石川の共同主催、大学行政管理学会中部・北陸地区研究会の共催で開催させていただきます。この場をお借りして、あらためて御礼申し上げます。

申し遅れましたが、私は本日の総司会を務めさせていただく北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター客員准教授の林です。よろしくお願いします。

それでは早速、基調講演に移りたいと思います。金沢大学人間社会学域の本所恵先生より「学びのためのカリキュラムと授業づくり」と題してご講演を頂きます。本所先生は平成15年に京都大学教育学部を卒業後、同大学大学院教育学研究科に進学し、平成17年から約1年間、スウェーデンのストックホルム大学に留学されました。その後、博士課程に進まれて、平成23年に

は博士（教育学）を取得されています。主なご専門は教育方法学，カリキュラムで，日本教育方法学会，日本カリキュラム学会で活躍されており，平成 21 年には日本カリキュラム学会研究奨励賞を受賞されました。主な研究テーマは「スウェーデンの総合制高校におけるカリキュラム改革」とお聞きしています。それでは本所先生，よろしくお願いします。

第一部 基調講演

「学びのためのカリキュラムと授業づくり」

本所 恵（金沢大学人間社会学域学校教育学類 准教授）

私はスウェーデンをフィールドに，後期中等教育のカリキュラムについて研究しています。日本では小・中・高の教育方法学ということで，教科を超えた授業の仕方，技術論に解消されない広い視野でカリキュラムや社会現象などを見ながら，現場の先生と一緒に授業のつくり方を研究しています。高等教育に関しては詳しくなく，皆さんからいろいろ教えていただきたいと思っています。

私はスウェーデンに 1 年留学して，いろいろな学校を見てきました。向こうでは小・中学校の段階から民主主義に基づく学校づくりが行われており，生徒会も学校運営のための話し合いに参加することが普通に行われています。どうすればそれを日本で行えるかを常々考えてはいるものの，私自身，実際には動けていません。そんな中で，このような共創プロジェクトはとても大切だと思っていて，どう発展していくのか楽しみにしております。

今日は「学びのためのカリキュラムと授業づくり」という演題で，授業，カリキュラム，カリキュラム編成論の基本的なところをお話しできればと思っています。

1. 「授業」を考える

1-1. 授業の階層性と構成要素

はじめに，授業を考えるということで，それに一番近いシラバスとはどういうものか，あらためて見てみたいと思います。今から皆さんがつくるシラバスは，一つの科目につき半年，授業 15 回分になりますが，それはその科目だけで存在しているわけではありません。当然のことですが，長期のプログラム（4 年），在学中全体にわたるカリキュラムの一部であることを念頭に置いておく必要があります。つまり，いろいろなシラバスがどのように組み合わせられているかも問題になるのです。シラバスに関しては，15 回の授業をよくするためにどのような要素が考えられるのかというふうに分析がなされていきます。

授業論では，授業には「学習者」「教師」「教材」の三つの必須要素があるとされています。「授業に不可欠なものは何ですか」と聞くと，教科書や机といった答えが出てきますが，そうではなくて，最終的に学習者がいて，教師がいて，そこに



介在する伝えるべき文化などの教材があれば授業は成り立つのです。教材と一言で言いますが、これを詳しく見ていくと四つの要素に整理できます。何をどのように伝えるのか、どのような学力を形成するのかという「教育目標・内容」、どのような素材を使って授業を行うかという「教材・教具」、一斉講義か、あるいはグループワークか、どのように働き掛けるかという「教授行為・学習形態」、そして、どのように授業の結果を把握するかという「教育評価」です。この四つを改善していくことで、よい授業を生み出すことができるだろうといわれています。この四つの要素をシラバスの中でどのように組み立てていくのが今日のポイントになるのだろうと思います。この要素を基に、学習者と教師が相互作用しつつ、学習者が新しい文化や教材の内容を獲得していくプロセスとして授業が描かれます。

四つの要素を改善していくことが目標となるわけですが、その方向性、よい授業とは一体どのようなものなのかを考えておく必要があります。

1-2. 「よい授業」とは？

よい授業とは、学習者が教材という対象世界との関係を編み直していく、あるいは学習者同士が他者との関係を編み直していく、さらには自分の中で自己の在り方や関係性を深めたり、豊かにしたりすることができる授業と言えます。授業は、教える側からすると何かを教授する場ですが、学習者側からすると学ぶ場です。従って、「学習を生起させなければ教えたとは言えない」という言葉があるように、教えることだけでなく、学習がどのように進むかを考える必要があります。最近では大学でもアクティブラーニングが盛んに行われていますが、アクティブであればよいというわけではなく、授業で話をしたり、何かを表現したりという外的活動だけでなく内的活動、つまり学習者の頭の中で行われている活動に目を向ける必要があります。

1-3. 学習観の変化

このように整理すると、よい授業をつくっていくために考えなければならないのは、学習の際の内的活動に関する学習論と、授業をもう少し広い文脈の中で位置付けるカリキュラム論の二つです。今日はカリキュラム論を中心にお話するので、学習論に関してはさらっとまとめておきたいと思います。「学習を生起させなければならない」というところまでは皆さん思うことだと思うのですが、では学習とは何かということで、幾つかの学習観を整理しました。

まず、伝統的に学習として考えられてきたのが「コメニウスの教授モデル（教刷術）」で、学習者は、初めは何も知らない白紙の状態、そこに印刷するように新たに知識を与えていくことが教授であり学習であるという捉え方です。それが、学習とは知識を植えつけるだけでなく、そこから学習者の行動を変えることである、つまり、何か刺激を与えて、それに反応することを繰り返すことによって、学習者が強化されることであるという考え方に立つ「行動主義的学習観」へと変わっていきます。今はそれからもう一歩進んで「構成主義的学習観」が主になってきています。これは、学習とは学習者がもともと持っている既存の知識構造を組み替えていくことだという考え方です。行動主義的学習観では、新たな行動を起こさせることが学習とされていましたが、構成主義的学習観では、学習者が持っているそれまでの経験や知識などを前提として認めた上で、それを組み替えて発展させていくことが学習であると捉えられています。従って、こういう学習観に立つと、教えたい内容、あるいは伝えたい内容だけでなく、学習者が今どういうことを知っているのか、何を知りたがっているのかを捉える必要が出てきます。最後に書いてある「社会的構成主義」は、学習者が一人ではなく複数いるコミュニティの中で、新たな知が生まれていくという考えで、学習を個人のものとしてではなく、社会的な営みとして捉えます。それに基づいて共同的な学習が行われていると言えます。このような学習観を持った上で、どのようなカリキュラムが考えられるかを見ていきたいと思っています。

2. 「カリキュラム」を考える

2-1. 「カリキュラム」とは？

「カリキュラム」の語源はラテン語の「currere（走ること、そのコース）」で、それが「人生の履歴」という意味に変わり、さらに「学校の教育計画」という意味へと変化しました。カリキュラムの和訳として、戦前の小学校では「教科課程」、中学校では「学科課程」といわれましたが、戦後の学習指導要領改訂のときに「教育課程」となりました。戦前は教科だけで学校のプログラムが組まれていたのですが、1951年の学習指導要領から、小・中学校では教科以外にも教えるべき内容や領域が設定されました。今では教科とともに、総合的な学習の時間や道徳、特別活動などの教科以外のものを含み込んでいます。

今、研究の中で使われるカリキュラムという言葉は、教育計画としての教育課程という意味を含み、他にも拡張して使われています。どのように拡張されたかということ、1970～1980年代に、教育計画としてのカリキュラムの概念に「ヒドウン・カリキュラム」という意味合いが加わりました。これは、意図的に計画されたもの以外に、学び手が学んでいくものがあるということです。例えば一斉授業の中で、教える側はいろいろな内容をカリキュラムとして組みますが、学び手側はその内容だけでなく、黙ってそれを聞くことも学びであるということを学習していきます。このように学校教育において教え手が教えようと思った以外のことが学ばれていく、それをヒドウン・カリキュラムとして議論の俎上に載せるということが行われたわけです。そういう議論を経て、カリキュラムという概念が、計画されたものだけでなく、学習されたもの全てというように拡張していきます。こうして、カリキュラムには、計画されたものという意味合いで使われる時と、学習されたものの総体という意味でつかわれる時があります。

さらに、学習者は「個人誌」としてカリキュラムを経験していくという考えから、「学びの経験の履歴」をカリキュラムと呼ぶという提案もされています。これに関しては、カリキュラムという意味を教育計画に限定すべきだという論もちろんありますし、学習経験の総体を指すところまでを認めるといふ論もあります。いずれにせよ、カリキュラムという概念は幾つかの重層性を持っていると言えます。

また、教育実践におけるカリキュラムを考えると、四つのレベルで整理することができます。一つ目は「制度化されたカリキュラム」で、国家・行政機関が決めるような、小・中学校の学習指導要領などに当たります。二つ目は、それがだんだん具体化され、学校レベルで「計画されたカリキュラム」です。三つ目は、一人一人の教師レベルで「実践されたカリキュラム」、そして四つ目は、学び手である生徒（学生）によって「経験されたカリキュラム」です。この四つを念頭に置いて、自分としてはどのようなカリキュラムを計画するのか、あるいはどのようなカリキュラムに参加するのかが問題になってきます。今日は二つ目の計画されたカリキュラムと、三つ目の実践されたカリキュラムの間のカリキュラムを実際につくってみますが、それぞれの参加者の立場や今までの経験などから四つのレベルで考えたものが、シラバスに結実していくのだと思います。

2-2. カリキュラム編成の構成要件

次に、シラバスやカリキュラムを編成する際に考慮しなければならない構成要件を見ていきます。まず基本要件としては、教育目的・教育目標、スコープとシーケンス、そして、コースは必修か選択かといった履修原理があります。

教育条件としては、カリキュラムを実施するときの時間配分が挙げられますが、これは一つのコース全体のことであり、1時間単位のことであります。実際に授業をするときに問題になってくるのが、学習者集団の編成、教職員の配置、教材・教具の種類、施設・設備です。

施設・設備に関しては、今あるものを使うしかないという意見もありますが、逆に言うと授業は施設・設備によって規定される部分がかかなり大きいので、それを見直す必要があります。それから、学校間の接続については垣根を越えるという点で難しいかもしれませんが、大学に関しては、高校との接続のほか、社会とのつながりについても考えていく必要があります。最後に前提条件として、どういう人が学ぶのか、その学校はどのような地域にあるのか、また、学校の特色や接続校・近隣校との縦と横の関係を考えなければいけません。

基本要件にあるスコープとは学ぶ内容領域を、シーケンスとは時系列でどういう段階を追っていくかという、カリキュラムを組み立てるときの軸となるものを指します。これらの言葉が生まれたのは、1930年代アメリカで、学習者の経験を基にカリキュラムを組み立てる経験主義のカリキュラム開発が進んだ時です。経験主義のカリキュラムでは、学問の体系によって学ぶ順番を決めることはできません。また、学習者の経験から内容を組み立てようにも、学習者の経験に任せておいては効果的な学びが期待できません。どういう経験をどういう順番で組み立てればいいのかの問題になりました。その議論の中で、どういう領域（スコープ）をどういう順番（シーケンス）で教えたらいいかということが整理されていったのです。スコープとシーケンスという考えを用いて経験を組み立てている、有名なカリキュラムがヴァージニアプランで、社会生活の主要な機能を分類し、学年を追ってだんだん領域が広がっていくようにカリキュラムが組み立てられています。1年生では「家族と学校の生活」という小さな社会ですが、それが2年生では「村や町の生活」に広がり、3年生ではさらに大きく「自然環境への適応」と領域が広がっていきます。

スコープとシーケンスは、いろいろな大学でつくられているカリキュラムマップに対応すると思います。何のためにカリキュラムマップをつくるのかが一番問題になると思うのですが、どういう領域の内容を何年生で学ぶのか、そして、それが相互にどう関わっていて、全体としてはどういうことを教えたいのかが把握できるものがカリキュラムマップであると捉えています。今、皆さんがつくろうとしている一つの科目の目標や授業形態、シラバスが全体の中でどう位置付くのかを明らかにすることができます。

3. カリキュラム編成論

3-1. タイラー原理

今回は、目標に関することも含み込んで、カリキュラム編成論の経緯を追っていきたいと思います。カリキュラム編成論において伝統的に使われているのがタイラー原理です。タイラー原理とは、カリキュラムを組むときに、まず目標を設定し、それを達成するために必要な教育的経験を明確にして、教育的経験を効果的に組織し、そして、目標が達成されているかどうかを評価するという、四つのことを順番に考えるというものです。今では当たり前だと思う人が多いと思いますが、それはタイラー原理を起源とする考え方が私たちの中に染み込んでいるからです。これは行動科学を基礎として工学的にカリキュラムを組む、あるいは教育をつくっていくようにする人々に最も広く浸透している考え方です。

目標から評価までの流れにおいて重要なのは、どういう目標を設定すればいいかということです。これについてタイラーは、学習者についての研究、現代生活の研究、教科専門家から得られる示唆の三つから目標を設定するように言っています。目標は教える内容だけでなく行動を伴うということが大きな主張で、今でも教育目標を設定するときにはタイラー原理を基にして、教える内容にプラスして行動が必要であるとされています。

ただ、これには行動主義的学習観に陥ってしまいがちであるという落とし穴があります。認知的な側面や学習者の能力（コンピテンシー）を見ながら目標を設定しているか、つまり、行動によって見える範囲だけで満足するのか、あるいは、ある行動の背景にある能力や思考を解

積しようとするのかという違いによって、目標の価値や深みが変わってきます。タイラー自身は、ただ単に刺激に対する反応としての行動を考えていたというよりは、むしろ精神的なものや身体的なもの、あるいは情緒的なものなど、いろいろな側面も含み込んで行動を捉えていました。

教育目標の分類学（タキソノミー）を提唱したベンジャミン・ブルームは、タイラーの考え方をさらに発展させて、どのように目標を設定すればいいかという分類を行っていました。ここでは教育目標がいろいろな言葉によって分類されていきますが、それは分類であって、決して学習の順序ではないということをきちんと踏まえる必要があると思います。

今は行動目標よりも、むしろ学力、思考力、判断力、表現力などの能力に注目することが多くなっていますが、それを教育目標として位置付ける場合、その評価の際には具体的な行動としてどういうものが現れるのかを判断すると思います。従って、どういう能力がどういう行動に結び付くのか、あるいはどういう文脈の下でどういう行動として現れるのかといった状況を含めて行動を分析し、判断材料にすることを、教育を計画する側がきちんと念頭に置いて、それを学習者と共有することが重要です。そういうことも組み込みながら、シラバスについて議論できればと思っています。

3-2. 工学的アプローチと羅生門的アプローチ

カリキュラム編成論でよく出されるキーワードに、「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」というものがあります。シラバスやカリキュラムをつくるように、教育はあらかじめ計画できるものであり、つくられるものだという考えに立ち、それを工学的に制作していくものと考えていることを工学的アプローチと言います。大きな目標を特殊目標として、それを行動的目標に具体化していき、そこから教材を選び、教授・学習過程をつくり、最後にそれを実践して、成功したかどうか評価を行うのが工学的アプローチです。

これに対して、1967年の文部省とOECDによる「カリキュラム開発に関する国際セミナー」で、羅生門的アプローチが提唱されました。これは、大きな目標から教育プログラムや学習プログラムを緻密に組んでいくのではなく、大きな目標を掲げたまま、実践者が自由に実践するという段階を踏みます。そして、その自由な実践を振り返る中で、何が得られたのかを判断・評価していくというアプローチです。当時、黒澤明監督の「羅生門」という映画が国際的に有名になりました。そこでは、見る人によって同じ事件でも違うように見える、あるいは違うように語ることができる、そして、その複数の視点は嘘ではなく、それぞれに真理を含みながらも決して同じになることはないことが描かれますが、教育実践もこのように複眼的に捉えられると考えるのが羅生門的アプローチです。

これらのアプローチの一番の違いは、評価方法にあります。工学的アプローチの場合、目標に対してどうだったかという評価にとどまりますが、見る人によって違うものになるという羅生門的アプローチを踏まえることで、目標にとらわれないゴールフリー評価がなされます。もちろん、決して目標を無視するわけではなく、目標の達成に加えて、何を学んだのかという学習者のさまざまな視点からの評価が、点数ではなく記述によって行われることが重要になります。工学的アプローチでの強調点は、教師だけでなく誰もがうまく授業をすることができる教材を作ることになりますが、羅生門的アプローチでは、教員の養成や学習者がどのように学習を行っていくのが重視されることになります。このように、カリキュラムを組み立てるときに何を重視するかが、どういう見方をするかによって随分変わってきます。

3-3. 逆引き設計論とパフォーマンス課題

多様な視点の評価やタイラー原理を踏まえつつ、目標をいかに多様にしていけるか、そして、

それをいかに計画段階で組み込んでいけるかという点で、「逆向き設計論」に着目できると思っています。これはルーブリック等のパフォーマンス評価につながるカリキュラム論ですが、タイラー原理の逆向きに設計するというものです。具体的には、まず求められている教育の結果（教育目標）を決めます。ここはタイラー原理と同じですが、その次に教育方法や学習方法を考えるのではなく、学習の結果目標に到達したかどうかを証明するにはどのような評価方法があるかを考えます。そして、証明できる証拠を生み出すために、どうやって学習すればいいかを検討するのです。

これについても学生に紹介すると「そんなことは当たり前だ」と言われますが、逆向き設計論は、目標と評価を対応させながら、評価を中心にそれを学習経験に組み込んでカリキュラムを作っていく点で新しい発想があります。評価の在り方によって学習やカリキュラムの在り方を大きく変えていく可能性を秘めています。例えば、評価の際には筆記テストや実技テストだけでなく、具体的な活動や作品などから読み取っていく、あるいは、さまざまな評価方法の中からそれぞれに適切なものを選んで評価を行うことで目標達成を図っていくという評価の改革がおこなわれます。さらに、それに見合った学習、カリキュラムの改革の可能性を秘めたカリキュラム論ということができます。

逆向き設計論では、いろいろなパフォーマンスによる評価をおこないますが、はじめにユニークな課題を与え、それを解くために小さな知識や技能を学んでいくというように、最終的な到達点を見据えてコースや単元をつくっていくことができます。そして、最終的なパフォーマンスとしてどこまでを求めるかというところでレベルを段階的に分けて、記述によってそれを説明するルーブリックが用いられます。

他にも例をご紹介したかったのですが、時間がないので省略したいと思います。雑ぱくになりましたが、以上で私の話を終わりたいと思います。

林客員准教授 本所先生、ありがとうございました。事前に簡単にメールでやりとりをさせていただいたのですが、この後のグループワークの趣旨を把握していただき、その前段として非常に分かりやすいご講演を頂きました。カリキュラムを中心に、大学教育の大局的なお話と、また、その中で学習目標や成績評価が大事であるというお話でしたが、その内容を頭に入れてこの後のワークに入ろうと思います。本所先生にもワークに入ってくださいと予定ですので、よろしくお願ひします。

第二部 グループワーク

「みんなでシラバスを作成してみよう！」

～授業デザインの共創～

イントロダクション

林客員准教授 ここからは、正味2時間半のかなりチャレンジングな時間になります。長丁場になりますが、よろしくお祈りします。まず、私と北陸先端大の院生の河島から、簡単にオリエンテーションをさせていただき、その後、自己紹介シートの作成を行いたいと思います。

私の方からは、少し全般的な話をします。金沢大、富山大、福井大、北陸先端大の4センターの教職員と学生で大学共創プロジェクトを組んで、今年が3年目になります。学生が入ったのは昨年からです、このようなフォーラムも昨年から始めたのですが、その成果として「大学共創宣言」を行いました。「①教員・職員・学生が、協働という形式を超えて、大学教育を共に創り上げること」「②大学間連携により、個々の組織文化を超えて、大学教育に関する共通の課題について考え、課題解決や新たな方向性を見出していくこと」ということで、教職員・学生・市民も含めた形で社会の中の大学を高めていくという宣言の下、今年もPart2としてこの活動をさせていただいています。昨年はどちらかというとディプロマポリシー的なものとして、今、求められる人材像を考えました。そこで頂いた提案も踏まえながら、今年はブレークダウンするような形でカリキュラム、大学教育の中身を議論しようということ、実際に授業設計を行ってみることになりました。その前置きとして本所先生をお呼びしてレクチャーをしていただいたわけですが、この活動のポイントは「教える」と「学ぶ」ということです。教える側と学ぶ側の視点を加味しながら、さらに支援者、補助者としての職員、市民のアイデアも入れながら、これまでにない斬新な大学の授業科目を設計するという、シラバスをつくることだけでなく、そのプロセスを通して教員・職員・学生の能力開発、ブラッシュアップも目的になるのではないかと考えています。今日のワークが一つの学び、気づきにつながり、それをもち帰っていただいて明日からのいろいろな活動に生かしていただけたらと考えています。

それでは、「みんなでシラバスを作成してみよう！～授業デザインの共創～」ということで、グループワークを設計してくれた北陸先端大知識科学部の河島にバトンタッチします。



河島 皆さん、こんにちは。北陸先端大の河島です。本日は「ごり」とお呼びいただければありがたいと思います。これからの流れについて簡単にご説明します。

まず、5分間で「自己紹介シート」を作ってください。本日使用するニックネームと、「あったらいいなこんな授業」というお題で記入してください。それを

2～3分ずつかけてグループ内で共有していただきます。これが最初の25分です。その後、グループワークに入ります。今回は主に授業の主体と学習目標をメインにしたいと考えていますので、30分あるいは1時間という枠の中で時間を工夫していただき、たくさんアイデアをポストイットに書いて「シラバス（作業用）」という模造紙に貼っていただきたいと思います。残った時間で授業計画、授業外学習、評価方法についてアイデアを出していただき、最後の30分で発表用の模造紙に清書して、シラバスを作成していただきたいと思います。

シラバスづくりのストーリーということで、皆さんには共創大学のメンバーとしてこれからシラバスについて考えていただきます。限られた時間ですが、たくさんアイデアを出し合っ、きらりと光るもの、今後伸びそうなものについて話し合っていただきたいと思います。その際の注意点として、「大学共創フォーラム 2013 グループワーク用参照資料」という資料をお配りしています。こちらには学習目標を表現するときに使う動詞群を、知識、技能、態度の各領域で幾つか例を挙げています。サービラーニングやアクティブラーニングなど、今、注目されているものについても資料を用意したので、そちらを参照しながらシラバスづくりを進めていただければと思います。

ワークを始める前に、思いついたアイデアはどんどんポストイットに書いて、模造紙に貼ってください。質より量です。積極的に発言するとともに、その発言に真摯に耳を傾けて、次の新しいアイデアを生み出せるように頑張ってくださいと思います。今回は気楽な雰囲気をつくるために、皆さんにニックネームを設定していただいて、お互いにニックネームで呼び合っただけだと思います。

アイデアは、マインドマップ的に広げてもいいですし、縦軸・横軸でマトリクス的に出していただいても構いません。また、収束の仕方として、ポストイットを集めて、それを一つのアイデアとしてまとめていただいても結構です。各グループにお任せしますので、それぞれのやり方で時間を見ながら工夫していただきたいと思います。

それでは早速、個人ワークに移っていただきますが、お茶を飲みながら、お菓子を食べながら行いたいと思います。金沢のお菓子をご用意したので、金沢以外の方はぜひ堪能していただきながら個人ワークをしていただきたいと思います。個人ワークで考えた主題、学習目標、授業科目はこれからの作業の基本になりますので、自己紹介のときに使いながら、こんなことについて話し合いたいというものを皆さんの中で共有していただきたいと思います。簡単ですが、以上です。よろしくお願いします。



林客員准教授 名簿に黄色でマーカーをしてある方が大学共創プロジェクトのメンバーです。各テーブルに必ず一人か二人いるので、不明なことがあればその方に聞いてください。全体で分からないことがあれば、手を挙げていただければ私か河島がサポートします。途中でわれわれからも説明しますが、最初は作業用の模造紙にポストイットを貼るなり、直接書き込むなりしてどんどん汚していただき、最後に発表用の模造紙に清書していくというイメージをお持ちいただければと思います。足りなければ余分の模造紙もありますので、そのように進めてください。よろしくお願いします。

〔グループワーク〕



グループワーク発表

林客員准教授 それでは、前に出て発表していただきます。時間がオーバーしがちになるので、3分ずつ通して発表していただき、その後、質疑があれば受けるという形でいきたいと思えます。ここが授業デザインの共創の醍醐味を参加者全員で共有するクライマックスになります。皆さん、結構力が入っているような感じがして楽しみです。それでは早速、グループAからご発表いただきたいと思えます。

グループA：久保 グループA「ゴボウに咲く」のくぼっちです。班のパワーバランスの影響で私が発表者というポジションに立たせていただいています。ありがたく思って頑張りたいと思えます。

授業科目名は「あなたのためになる社会実践演習」です。主題は二つあって、一つは「活動・体験を通して社会の仕組みを知る」で、大学にいる間も世の中がどのように回っているかを理解し、実際にその中に入って活動してみるということです。もう一つが「既存の学問の限界を

知る」です。最初の自己紹介で、「大学の先生が言っていることは本当に正しいのか」という授業をしたらどうかというコメントが出てきました。班の中でも確かにそれは議論するのによいテーマというか、考えていくべきことだと思ったのでこの主題を掲げました。

授業時間外の学習方法、反転授業というのは、一般的に大学や学校に来て何かを学ぶという学習形態が今までは多かったと思いますが、こちらでは大学以外のところで学んだものを大学に持ってきて、それに基づいてディスカッションを行うという形態を取っています。従って、大学以外で学ぶということがフィールドワークに当たり、大学に持ってくるということが討論に当たります。

学習の目標は「問題発見力と問題解決力・企画力を身に付ける」を軸に置きます。例えば、大学の授業にバイトを取り入れて、実際に給料をもらい、バイト先の企業、組織で見つけた問題を解決していきます。その中で大きなテーマとして企画力を挙げています。活動を行う中で、問題を見つけたり解決方法を探ったりすることで効果的な情報収集能力が身に付きます。また、効果的な情報収集能力を身に付けて解決策を出した後、実行するためには、プレゼンテーション力など周りの人を巻き込んでいく能力が必要になります。従って、情報を取り入れて伝達するプレゼンテーションの能力も、学習課題を達成していく中で身に付けられると思います。それから「人々と協力しながら楽しむことができる」は、「コミュニケーション」などの格好いい言葉で書こうと思ったのですが、このままの雰囲気を書かせてもらいました。

実際の授業の流れについてです。バイト以外の活動例としては、まちの魅力を外国人に発信するプロジェクトや、幅広い年齢層で盛り上がる飲み会（お酒に強くなるという副次的な目的も含む）、音楽を生かしたまちづくりのイベント、子どもを招いての楽しい活動の企画など、問題発見力、問題解決力にそのままつながる企画をフィールドワーク①で実施します。それをいったん持ち寄って中間プレゼンで発表を行い、さらにそこで学んだことを生かしてフィールドワーク②に移ります。そして、最後の批判的討論が先ほどお話しした「既存の学問の限界を知る」につながります。例えばバイトで組織の中に入って仕事をするとき、学問的に切り取ると経済学や経営学が使えると思いますが、実際にそのとおりに全てが成り立つかということ、恐らく否な部分もかなりあると思います。そういうことも考えて、実際の学問が現場で生かされていないのであれば、最初の「教授の言っていることはおかしいのではないか」というところに戻るといようにして学問を見詰めていきます。

受講者を20～25名に絞っていますが、教員の方からすると恐ろしく負担の大きい授業になると思われるでしょう。しかし、教員は中間プレゼンの評価しか行わないので、実際の負担はとても軽くなっています。フィールドワークの評価を行うのは、企画に関わった人です。例えば外国人の方にプレゼンをする場合は外国人の方、バイトの場合はバイトの上司になります。社会実践演習ですから、実際にその上司になる人が学生を評価するということです。最後の批判的討論については、学習者、つまり学生同士が互いに評価し合うことで成績評価につなげたいと考えています。

林客員准教授 ありがとうございます。バイトでも、いろいろな大人の世界が見えますね。非常に大事なフィールドだと思います。次はグループB、お願いします。

グループ B：大津・浮田 リーダーのおつつ（大津）とうっきー（浮田）です。グループ名の「BALM」は Best Active Learning Method（一番いいアクティブラーニングの解決方法）という意味です。BALMという言葉自体は、なごみ、やすらぎという意味ですが、今回のシラバスづくりにおいて私たちの一番基本的な考えとなったのが BALM だったので、このグループ名にしました。

授業科目名は「Collaborative Learning for School Spirit Promotion (母校愛向上のための協働学習)」です。最初に話したときに、今の学生には母校愛がないというコメントがあり、協働学習を通じて母校愛をつくろうと考えました。

授業の主題は、英語での大学プロモーションビデオ作成です。今、教育界の中でグローバルな人材育成がいられています。そのため英語ということと、大学をプロモーションするホームページに張り付けるものを協働学習の中で作ります。

授業形態はグループワークで、授業規模は30名程度を想定しています。学習目標は三つで、「自分たちの母校と地域を英語で伝えることができる」「チームとして協働作業を行うことができる」「仲間意識を高めることができる」人材を育成します。科目名に「母校愛」を掲げていますが、一つ目の目標は、母校と地域との関わりを自分たちの力で英語に訳すことです。二つ目



の目標の「きょうどう」作業は、「共同」と「協働」があります。「共同」はグループのメンバーで行動するだけですが、「協働」には行動した上で新しく一つのものをつくり出すという意味があります。私たちは後者を強調したかったので「協働」にしました。三つ目の仲間意識は、グループだけの仲間意識ではなく、学校と地域の関係性そのものです。

次に、授業計画ですが、まず、知識を得て、情報を集め、最後にPV(プロモーションビデオ)を作成します。最初の全体講義で、PVの作成方法を説明します。

その後、自分たちで調べたことを授業の中でまとめ、最後に実際にPVを作成します。

授業時間外は調査を中心に学習します。PVを作成するために自分の母校や地域の歴史について文献調査をしたり、実際に現場に行ってフィールド調査を行ったりします。また、そこに住んでいる人の考え方が主になるので、インタビューも入れました。

最後に成績の評価方法ですが、PVの評価と自己評価を行います。私たちの班で一番話し合ったのは、どういう評価をすればいいかということです。最初に掲げたとおり、私たちはシラバスを考える上で「BALM(なごみ)」を強調したかったので、相対評価はあまり使いたくありませんでした。しかし、ある程度の評価はしなければいけないので、厳しすぎず、柔らかい感じの自己評価をしていただきたいと思います。

林客員准教授 ありがとうございました。コラボレーティブな発表で非常によかったと思います。形になるプロモーションビデオを作るという内容も非常にいいと思います。

それではグループCの方、お願いします。

グループC：内田 グループCのucchi(うっちー)です。

授業科目名は、「自己を知り、語り、創造する」です。最初の自己紹介の段階で私が皆さんに提示したのは、最近の学生には一人でいられない人がとてもたくさんいるということです。ご飯も一人で食べられない、授業も誰かと一緒になくてはいけない人が多いことが私としては非常に不満で、もっと一人で積極的にいろいろなことに関わっていけるような強い人間を育成できればと思い、この授業をつくりました。

授業の主題は「枠を出る力」「問う力」「集団と自分」、学習目標は「他人の意見を比較し、人



格を理解した上で、批判し、述べることができる」「視点を変えて新たな疑問を創造することができる」「自分のことを客観的に説明することができる」を掲げました。

授業計画としては、まず、人を知る方法を知ってもらいます。その方法を基に、身近な人や過去の偉人など、他人を知ってもらいます。他者を知ることによって自分を知ることができると考えました。自分を知ったら、次にさまざまな思考方法（論理的思考、批判的思考、創造的思考）を

学びます。自分を知り、さらに思考方法を学んだ後、最後に正しいディベートの実践を行います。ディベートをすることで、それまでの授業で学んだ方法や自分を外に出してもらいます。

授業時間外の学習方法としては、例えばニュースのトップ記事に対して批判的な考えを日ごろから持ってもらうなど、日常的に思考法の実践をしてもらいます。

成績評価の方法は、初回に授業内容を説明せずに心理テストやアンケートなどで自己分析をしてもらい、最終回にも同じく自己分析をしてもらいます。そして、初回と最終回とで自分に対する考えの変化を見ます。それ以外に他者分析に関するレポートを作成し、授業で学んだ論理的思考法がきちんと身に付いているかを評価します。

林客員准教授 素晴らしい発表だったと思います。ありがとうございます。何気ない日常の中で自分と他者をよく考えることは、よい素材になると思います。

次は、グループDです。

グループD：中尾 グループ名は「ACI48」で、私はリーダーのきりんです。授業科目名の「歩いていこう、小さくて深い異文化学習」の頭文字を取って「ACI」としました。

授業の主題は「地域の人々を知る」「自分と異なる属性の人たちの世界を知る」「傾聴および伝達」です。

授業形式は地域でのフィールドワークで、2コマ連続で4単位の科目です。

授業規模は48名なので、「ACI48」です。

学習目標は、一つは「地域の中で自分の存在価値を知ることができる」です。今、大学周辺で違法駐車をしたり、Twitterで変な投稿をしたりといった問題がありますが、自分の立ち位置を把握することができるようにするのが目標です。そして、「よく聞くこと、よく聞き出すことができる」、逆に「人に頼る」ことを目標とします。「人に頼る」は、例えば現地に行くときもGoogleマップなどを使わずに、人に場所を聞いて目的地にたどり着く方法を学んでほしいということです。最後に「足元を見て相手の立場に立つことができる」を掲げています。

授業計画です。1～4回目は、班分け、訪問先決め、訪問先のアポ取りを行います。一番大事なのはイントロダクションで、科目の内容と、その意図についてきちんと説明します。5～14回目はいよいよフィールドワークになります。実際に団体や施設に行きますが、例えば、ろう学校の生徒から手話を教えてもらったり、介護施設でお年寄りから歴史の話を聞いたり、原発に行き行って現在抱える問題について聞いたりします。また、他大学のオープンキャンパスに参加して研究室を見たり、商店街の商店の店主の話を聞いたり、病院に行き行って患者さんと話をしたり、おいしい和菓子を提供する和菓子屋に話を聞きに行ったりするという内容です。15回目に

は、主題の「傾聴および伝達」の伝達ということでプレゼンテーションをしたいと思います。訪問先で話を聞いた方を講師として招き、ユーストリームで全世界へ配信します。そして、コミュニティチャンネル、ローカルケーブルテレビ局などに取材してもらい、大々的に放送してもらうという形を取りたいと思います。これによって自分の立場が分かり、きちんと学習することができます。

授業時間外の学習方法です。まず一番大事なのが、どこに行くかを考えることです。また、あらかじめ現地に行くことも大切ですし、プレゼンテーションの前に取材先にもう一度行って話を聞き、仲よくするというを考えています。

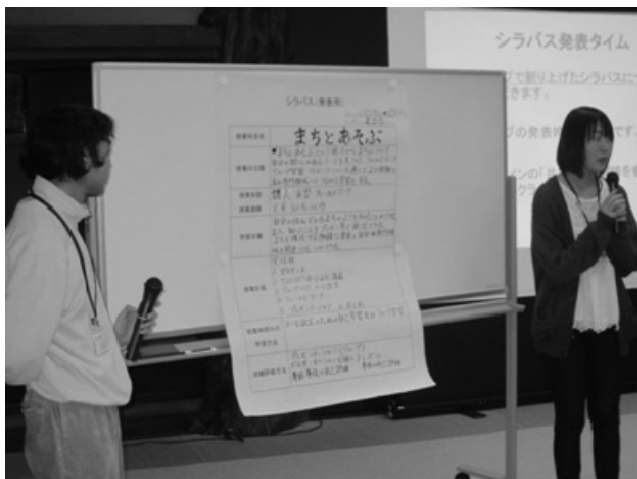
評価成績方法ですが、最後のプレゼンテーションを50点とし、聞き取った内容をまとめて記録するというレポートを課して、それを50点とします。さらに、寂れた商店街などでは、訪問先に提案をしたらボーナスとしてプラス20点もらえるという形にします。

林客員准教授 ありがとうございます。身近なところにたくさん異文化があります。この授業はすぐにでもできそうな感じです。「ACI48」というようなキャッチーな言葉にすると、授業も楽しくなりますね。各グループで観点が全く違うので楽しいです。

次はグループEです。

グループE：金子 グループ名は「マジカル★ピアッツア」、リーダーはミコウ君です。皆さんはピアッツアという言葉を知っていますか。ピアッツアはヨーロッパの国の言葉で、人や動物が音楽など楽しいことにつられて自然と集まるところという意味です。そういう魔法のような場所が自分たちの地域にあったらすごくすてきだと思いませんか。私たちはそう考えてこのグループ名にして、そんなまちをつくり、また、そのまちについて学ぶために、「まちと遊ぶ」という授業を提案します。

グループE：三田村 授業の主題です。「まちと遊ぶ」という視点から、まちについて自分の関心のあるテーマを見つけ、フィールドワーク、グループ学習、プレゼンテーションを通して、より理解を深め、専門領域へつながる学習をすることをキーワードとしました。しかし、一見して、つながっているような、つながっていないような、よく分からない感じがしませんか。実は私たちの班には、物の見事にいろいろな人が来ていました。共創大学という目的には非常に合致しているのですが、ある人からは地域のつながりについて、またある人からは大学院の講義システムについてというようにいろいろなアイデアがあったので、それを集約したらこんな感じになってしまったのです。順番としては、学習目標からディスカッションに入り、その後、授業計画、成績評価と来て、主題が出てきました。



後、授業計画、成績評価と来て、主題が出てきました。

学習目標は「自分の住んでいるまちのよさを知ることができる。また、知ったことをプレゼン等で発信できる」「まちを構成する多様な要素と自分の専門領域を関連づけることができる」です。さまざまな意見がありましたが、特に専門領域の関連づけという点が共通していたので、それをメインとして考えていきました。

学習方法です。全15回の中で、まず講義についてのガイダンスをして、次に、

地域から呼んだゲストスピーカーの講義を受けます。その講義を足掛かりとして、7~8人のグループをつくってテーマを設定してもらいます。テーマ設定については授業時間外の学習として、自分で、あるいはグループで考えてもらいたいと思っています。テーマが決まったら、フィールドワークを通して、地域に根づいた、あるいは地域と関わりのある分野について、自分の足で現場に行って考えていただき、最後にプレゼンテーションをしてもらいます。このプレゼンテーションは、成績評価の方法と密接に関わっていますが、まず、グループごとに一つプレゼンテーションを行い、それとは別に個人でポスターセッションを行います。そして、個人のポスターセッションの後にレポートを書いてもらいます。それから、事前に自分の能力がどれだけあるかを見て、ポスターセッション、プレゼンテーション、レポートやフィールドワークを通して自分がどれだけ成長したか、その差を自己評価で捉えてもらいます。また、プレゼンテーションやポスターセッションでの発表について、メンバーから事後の他己評価をしてもらい、それを総合して成績を評価します。

授業の定員は50名です。本当は30名ぐらいがよかったのですが、ここは教員の方の苦勞をしのびつつ50名に増やしました。なぜなら、人数が多い分、いろいろな視点が見られるからです。このことは非常に重要だと思います。

林客員准教授 非常にいい発表だったと思います。グループの発表と個人のポスターセッションがあり、自己評価と他己評価を入れている点が面白かったです。後ほど本所先生からもコメントを頂ければと思います。

次にグループF, お願いします。

グループF: 南 グループ名は「F⁶」で、私は発表者のミナミです。

私たちが考えた授業科目名は「もしも法学生が看護をしたら・・・」です。授業の主題は「他者の力を利用した潜在力の発掘」にしました。私は看護学生ですが、看護学部なのに教育学の授業があり、そこで先生が教育学部の人と看護学生が考えることは違うとおっしゃっていました。いろいろな学部で同じ題材について話すと、違った視点でいろいろなことが見られて面白いのではないかと思います。

授業形態は多人数によるアクティブラーニングで、グループワークを取り入れていきます。

学習目標としては、「異分野からの知的刺激を活用できる」「コミュニケーション能力（発信力・受信力）を身に付けることができる」「分析力・評価力を高める」を掲げました。

授業は休み中の集中講義とし、学生による発表を中心に行います。

授業時間外の学習方法としては、学生が勉強しやすいように通常期にICTを活用し、LINE等のSNSを活用します。

成績の評価方法としては、学習目標に「分析力と評価力を高める」を挙げましたが、学生の総合評価を重視し、他専攻の学生の分も含めて評価を行います。また、学生だけでなく教員による評価も併用します。

林客員准教授 ありがとうございます。大学にはいろいろな教育研究資源があるので、他の分野の学生が違うフィールドでやってみるのも、お互いに学び合うことがあって非常にいいと思います。

それではグループG, お願いします。

グループG: 小泉 私たちのグループ名は「Escape!」です。何から逃げるかは発表を聞いていただければ分かると思います。

授業科目名は「Enjoy Campus」で、内容は「学生が主体となって大学内でのイベントを楽しみながら企画運営する」ということです。これは私の発案ですが、理由は二つあります。一つは、大学生に愛校心がないことです。もう一つは先生から言われたことですが、授業中に生徒がうなずいたり、笑顔を見せたりしてくれないので、もっと学生に楽しんでもらいたいということで、これが企画のコンセプトになっています。授業形態は実習です。授業規模は30～40人で、5～6人の班で授業をしようと思っています。学習目標は「主体的に自分のアイデアを説明できる」「新しいイベントを創造することができる」「自己実現するために積極的に他者と協調することができる」です。

授業計画ですが、前半・中間・後半に分けており、前半で昨年の履修者の発表を聞きます。大学生が楽しいことをやっている例として私が知っていることでは、流しそうめんならぬ流しパスタをしている学生がいます。また、結婚式場と提携し、学生と社会人を合わせて恋活パーティをしている事例もあるので、それを紹介して学生に楽しむきっかけを与えようと思っています。班分けをして、中間時点では班で企画を考え、進捗状況を全体で共有します。その後には学生によるプレ



実行をしようと思います。ここで出てきた案が「逃走中」です。テーマパークを舞台に鬼から逃げるというテレビ番組がありますが、それを学校で行うのです。まずは学生だけで企画を実行し、その後に地域住民と行い、最後に報告会をします。「逃走中」であれば、例えば地域のおじいちゃん、おばあちゃんと逃走することを考えています。

授業時間外の学習方法としては、結構重くなりますが、各班で企画準備や地域との調整作業をしてもらいます。

成績評価方法には非常に悩みましたが、個人の企画への貢献度や企画の質、それから地域住民の方にアンケートを取って、その満足度で評価したいと思っています。

他の班と比べて学生色が大変強いと思います。最後に地域交流を置いています。まずは学生が楽しむことによって最終的に地域も盛り上がるのではないかと、わがままで、ちょっと新しいシラバスの発表でした。

林客員准教授 ありがとうございます。ここは私のいたグループですが、学生から学ばせてもらいました。非常によい発表でした。

それでは、グループHの発表です。

グループH: 塩田 グループ名は「HAWAII へ行き隊」です。全く関係ないのですが、最初に「H」と書いてしまったのでこの名前になりました。

授業科目名は「自分デザイン学」で、授業の主題は「幸せでやりがいのある人生をデザインする基本的能力を身に付ける」です。

授業形態はグループワークが主で、講義はほとんどありません。グループワークなので、人数があまり多くても收拾がつかないということで、授業規模は最大40名ぐらいにしました。

グループH: 大上 授業計画としては、まず、幸せになるためのテーマを考えます。例えば、長い人生の中でお金に困りたくないから投資信託や株について勉強したいとします。それと同



じような考えを持つ人が 5~6 人集まってグループをつくり、この銘柄を買って、いつまでに幾らの利益を上げるという目標を設定してプランを立てます。これが授業の前半に当たります。後半ではクロスセッションを行います。違うテーマのグループの人たちに、自分たちのグループが行ったことを報告し、最後に全体の発表会をします。

学習方法は授業外学習がほとんどで、自分のテーマの調査やプランの実践などを行います。

成績評価は、学生間の相互評価（40%）、教員による作成資料・レポート評価（40%）、卒業生によるプレゼンテーション評価（20%）の三つで行います。

林客員教授 ありがとうございます。人生幸せでないとは駄目ですから、大事な科目だと思います。

最後に I グループです。よろしくお願いします。

グループ I：小林 グループ名は、最初は「I」でしたが、テーマが裏世界ということで「I♥urasekai」としました。「裏の世界」という授業科目名ですが、目的は「ダマされない生き方を身に付ける」で、物事の本質を見抜き、それを生かして頑張っていけるようになりたいという狙いがあります。また、「身近なテーマや素材を使って本質を見る」も主題として掲げています。

授業形態としては、主に演習を行い、対象は 1・2 年生がいいのではないかと結論に至りました。定員は 25 名程度です。多すぎず、少なすぎずという感じで、1 グループ 5 名の 5 班で演習をします。

学習目標は「知識や情報と現実の比較ができる」「状況を合わせた行動ができる」です。表の世界ばかりではなく、いろいろな世界があることを知ることを目標としています。

授業計画ですが、具体的な内容としては、金融業界や法律の世界について、企業へ行っているいろいろな裏話を聞きます。一つの裏ユニットでフィールドワーク実習をした後に発表し、レポートを出してもらおうということを 2~3 回繰り返します。

授業時間外の学習方法としては、グループワークでの話し合いや、図書館などでの情報収集や座学での事前・事後学習を行います。

成績評価方法は、質的評価、パフォーマンス評価とありますが、これはさまざまな視点から各班の発表を評価するものです。他に自己評価を挙げましたが、学生が自分で付けると全て「良」になってしまいがちなので、知識の定着度を見る従来型テストを取り入れたらいいのではないかと意見も出ました。

林客員准教授 ありがとうございました。日ごろ 1 年生のオリエンテーションで、裏世界の人はとは接してはいけないという話をしているのですが、そこに突っ込んだ非常に斬新な科目です。聞いていて大変面白いと思いました。

これで 9 グループの発表が終わりました。今までは一方的に発表者が話したので、ここからは軽く双方向でいきたいと思います。最初の本所先生の基調講演と九つのグループ発表は非常にユニークで、今後、他の大学でも似たようなことを行ってもらえたらと思いますが、そうい

うことも含めて、感想でも結構ですので、どなたかご発言を頂けますでしょうか。特に本所先生のご講演に関しては、日常の課題として抱えているカリキュラムマップのことや、実践的なところでの課題などについて質問を投げかけていただければと思います。



新堀 主催者の一人である金沢大学大学院の新堀です。本所先生のご講演について質問です。スウェーデンの中等学校の教育について研究されているということですが、発表の最後にあった新しいカリキュラム編成論、新しい評価方法などの教育法は、スウェーデンでは日本よりも早くから実践されているのでしょうか。

本所准教授 これはスウェーデンから持ってきたものではなくて、私はスウェーデンでは後期中等教育で専門教育と普通

教育、職業教育と普通教育をどう組み合わせているかを見ています。今日、皆さんは日常性、自分への切実さ、人生への影響を多く含んだ科目をつくっていただきました。そういうことを求めて学びへ向かっているということで、それを一つの科目ではなく、カリキュラムとしてどうであるかを見ているわけです。今日ご紹介したパフォーマンス課題、逆向き設計論などのカリキュラム編成論はそれとは別の文脈で、小・中学校の授業をどうするかというところで私自身も学んできたものです。最後の事例は、中学校の理科の先生が面白いことを行っていたのでご紹介しました。

杉森：金沢大学で教員をしております杉森です。まず、ご講演の中で、目標を要素化することはよいことなのだろうかと疑問に思いました。それから、先ほど9グループから、私はこれを身に付けたい、あるいは切実な状況の下でこういう科目があつたらいいということで発表がありました。これから新しい大学がつくられていくとすれば、目標が要素化された中でカリキュラムが自然に立ち上がり、既存の大学が分解されていくようなバーチャルな大学になり、今までの大学は何だったのかということになっていくような気がしています。私たちのつくり上げたカリキュラムが達成されることが、既存の大学や小・中・高に与える影響、また、その実現可能性について、目標の要素化と絡めてコメントを頂ければと思います。

本所准教授 大きな問いを投げかけられました。シラバス作成と新しい大学の可能性で言えば、実際に目標を要素化してしまうのはいけないことだと思っています。一方で、評価基準は具体的でなければならないとも思っていて、私自身がいつも心しておこうと思っているのは、一つの科目、一つの大学でできることの限界や、ここまではやりたいということの基準を設定しておくことです。今日のことでは、皆さんは日常と関わる中で



科目をつくり、評価基準として設定すべき内容と、それ以外に求めておくこと、次の学び、次の人生につながることをそれぞれの授業で計画してくださったと思いますが、恐らく最後に評価できるのはその一部でしかない、いつも思っています。

今の大学との関わりについては、皆さんは領域横断的な科目を立てられたと思いますが、頭の中には自分が学んできた専門領域の知識や体系があると思います。その前提を崩しているつもりでも実は崩されていないところがあって、そこに今あるものの大切さがあるということも、意識していきたいと思っています。

それから、気付いたことですが、どのグループも科目の担当教員は一人で、グループワークを学生に求めながら教員には参加を求めているように思えました。教員の学びと学生の学びもパラレルになっているので、そういう中でこれからのことを考えていけたらと思っています。

林客員准教授 ありがとうございます。共創大学のカリキュラム設計に関わるような、非常に大事な点でした。今のお話を本所先生のまとめのコメントに代えさせていただくことにします。

今日のグループワークを通して、新しい気付き、学びが、それぞれにあったと思います。私もありました。明日から教えること、学ぶこと、支援することへの誓いを、リフレクションシートに記入して、お持ち帰りいただければと思います。

総括

林客員准教授 最後に、私から簡単にコメントを述べさせていただきます。大学共創ということで、所属、立場、世代を超えた対話を通して見えてきた新たな気付きがあったのでしょうか。また、今年は授業デザインを皆さんでつくりましたが、ワークを通して「共創」を体感していただけたのでしょうか。グループの中で仲よくなって、また交流していただければと思いますが、グループワークによる仲間との共有、それからリフレクションシートに書いた明日への誓い、今の思いを胸に刻んで、明日から一歩前に進んでいただければと思います。

最後に、共催いただいている大学行政管理学会中部・北陸地区研究会、常務理事の三谷靖司南山大学学務部長より、閉会のご挨拶を頂きます。

クロージング・閉会の挨拶

三谷 靖司（大学行政管理学会中部・北陸地区研究会 常務理事）

皆さん、今日はどうもお疲れさまでした。結構長い時間でしたが、どうだったでしょうか。私は、このフォーラムに昨年度も参加させていただきましたが、それがとても楽しくて、役に立ちました。今年度も、また、リフレッシュすることができました。普段の業務でマクロな視点から教育課程の体系化の話はするのですが、今日のように一からつくり上げていくという体験はあまりなかったので、非常に心地よい疲れが頭に残っています。

発表していただいた学生の方たちからは、いろいろなことを学びたいという思いがあらためてよく伝わってきましたし、また、こういうことを求めている学生がたくさんいることを実感しました。自分自身、学生に直接触れることはあまりないのですが、組織全体に対して学生一人一人とより強く向き合うことを求めていこうと心に誓いました。

前日も思ったことですが、今日の集まりには教職員・学生が非常によいバランスで参加して

いて、みんなで一つのものをつくり上げています。私もいろいろな地区に出かけますが、こういう形で実施されているところはあまり知りません。そういう意味では、この地区に特徴的な取り組みだと思しますので、林さんは大変かもしれませんが、来年以降もぜひ発展的に継続していただければと思います。

最後に、お手元に大学行政管理学会のパンフレットをお配りしております。ぜひご一読いただき、興味のある方はご参加いただければと思います。大阪や東京

などいろいろな地域で活動していますし、中部・北陸地区でも、今年度末から来年度にかけて幾つかの勉強会や研究会を1回ぐらいは開きたいと思っています。ここに参加している方の中にも企画グループに入ってくださいている方がいるので、その方から勉強会の情報が流れるようにしたいと思います。

今日はどうもありがとうございました（拍手）。



林客員准教授 これにて「大学共創フォーラム 2013」を終了させていただきます。本日は大勢の方々にご参加いただき、あらためて感謝申し上げます。今日つくり上げた授業科目が、どこかで現実に形になればと思っています。ありがとうございました（拍手）。

■資料 「学びのためのカリキュラムと授業づくり」(本所 恵)

大学共創フォーラム2013
 みんなで大学教育について語ろう! Part2 授業デザインの共創
 2013年12月21日(土) @金沢学生のまち市民交流館

学びのためのカリキュラムと授業づくり

金沢大学 人間社会研究域 学校教育系
 本所 恵

contents

1. 「授業」を考える
 - ▶ 授業の階層性と構成要素
 - ▶ 「よい授業」とは?
 - ▶ 学習観の変化
2. 「カリキュラム」を考える
 - ▶ 「カリキュラム」とは?
 - ▶ カリキュラム編成の構成要件
3. カリキュラム編成論
 - ▶ タイラー原理
 - ▶ 工学的アプローチと羅生門的アプローチ
 - ▶ 逆向き設計論とパフォーマンス課題

▶ 2

「授業」を考える

「授業」の階層性と構成要素

1. 教育目標・内容・・・何を教え、どのような学力を形成するか
2. 教材・教具・・・どう素材を使うか
3. 教授行為・学習形態・・・どのように働きかけるか
4. 教育評価・・・どのように授業の結果を把握するか

▶ 学習者が教師と相互作用しつつ、文化内容を獲得していくプロセス

▶ 4

よい授業とは?

「学習を生起させなければ教えたとは言えない」(Bain, 2004)

「教授(ティーチング)から学習(ラーニング)へ」

▶ **アクティブ・ラーニング:**
 学生が学習において能動的に活動し、自らの学習の主人公となる(自らの学習に責任をもつ)ことを重視した授業形態。グループワーク、討論、発表、調査、製作、実習など。90年代以降広がる。

▶ **アクティブであればよい、というわけではない。**
 外的活動(行動面) ⇔ 内的活動(認知面)

▶ 5

学習観の変化

1. **コメニウスの教授モデル(教刷術)**
 印刷術によって大量の知識が迅速に多数の本へと印刷されるように、「教刷術」によって大量の知識が迅速に多数の子どもに教授される。
2. **行動主義的学習観**
 学習とは、行動を変えること。刺激-反応の強化。
3. **構成主義的学習観**
 学習とは、既存の知識構造を通して外界と相互作用しながら、新しい知識を得て、新しい知識構造を構成すること。
4. **社会的構成主義**

▶ 6



カリキュラムとは？

- ▶ **カリキュラム (Curriculum)**
 - ▶ 語源: ラテン語「currere」・・・走ること、そのコース
 - 人生の履歴
 - 学校の教育計画
- ▶ **教育課程**
 - ▶ 戦前は「教科課程」(小学校)、「学科課程」(中学校等)
 - ▶ 戦後、1951年の学習指導要領改訂で、「教育課程」に。

▶ 8

カリキュラムの重層性

- ▶ **カリキュラム概念の拡張**
 - ▶ 教育計画としての教育課程
 - ↓ ・ヒドウン・カリキュラム (Jackson, 1968)
 - ▶ 学習経験の総体
 - ↓ ・学習者の個人誌 (Pinar)
 - ▶ 学びの経験の履歴 (佐藤, 1996)
- ▶ **4つのレベル**
 - ① 制度化されたカリキュラム — 国家・行政機関
 - ② 計画されたカリキュラム — 学校 (大学・学部)
 - ③ 実践されたカリキュラム — 教員
 - ④ 経験されたカリキュラム — 生徒 (学生)

▶ 9

カリキュラム編成の構成要件

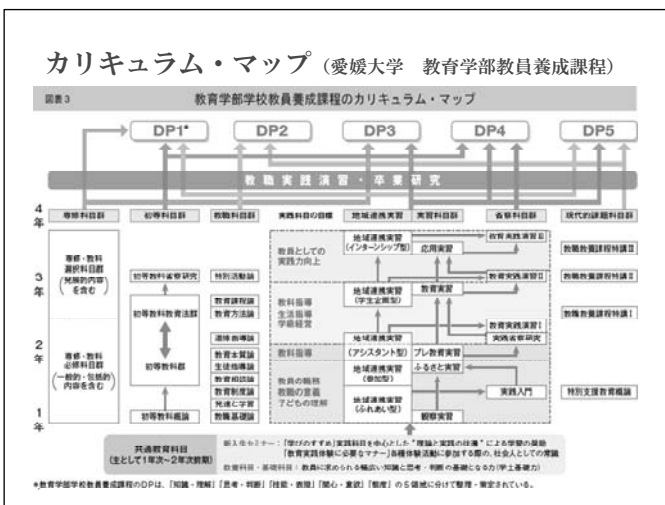
構成要件	主な論点
基本要件	教育目的・教育目標 価値・理念・校風(エトス)。目的。目標(教材、指導課程と学習形態、学力評価)
基本要件	スコープとシーケンス 経験主義か系統主義か。単元の配置。
基本要件	履修原理 履修主義か修得主義か。必修か選択か。
教育条件	時間配分 1単位時間。教科などへの配当日時数。年間の流れ
教育条件	学習者集団の編成 集団の規模。異質化原理—等質化原理。固定的—柔軟に変化。
教育条件	教職員の配置 教科担任制か学級担任制か。TT、ゲストティーチャー。
教育条件	教具、施設・設備 教具の種類。教室の種類と配置。オープン・スペース。
教育条件	学校間の接続 接続校との関係(連携、一貫など)。入試制度のあり方。
前提条件	学習者 発達段階、学力、性格特性、ニーズなど。
前提条件	地域社会 学校への期待、協力体制、地域文化。
前提条件	学校の特色 伝統、各種教育資源など。
前提条件	接続校、近隣校との関係 連携の有無。学校間競争の有無。
教育課程編成の制度	編成主体。学校間ネットワーク。マネジメント。評価。

教科・科目間の関連を考える

- ▶ **スコープ(領域) と シーケンス(系統)**
1930年代アメリカ、経験カリキュラム開発運動の中で提唱される。
- ▶ **ヴァージニア・プラン (社会生活の主要な機能×興味を中心)**

社会生活の主要な機能	1学年: 家族と学校の生活	2学年: 村や町の生活	3学年: 自然環境への適応
	強調のために選ばれた興味を中心の諸相		
生活や財産や天然資源の保護保全	私たちは家庭や学校で生命や健康をどのように保護しているか	私たちは社会において生命や健康や財産をどのように保護しているか。動植物は郷土の人々をどのように助けたどのように保護されているか	私たちははるばる遠く離れた自然環境のもとで、人間や動植物はどのようにして自然の威力から自分たちを保護しているか
物や施設の生産と分配	私たちがつくり育てたり栽培したりするものはどのように私たちが助けているか	私たちの郷土では物や施設を生産するためのどんなことがなされているか	自然環境は各地の生産物にどんな影響を与えているか
物や施設の消費	お家の人々はどのようにして衣食住をとのえているか	私たちは私たちの国で与えられるものや施設をどのように使っているか	

▶ 11





タイラー原理 (Tyler, 1950)

1. 目標を設定する
 1. 学習者についての研究
 2. 現代生活の研究
 3. 教科専門家から得られる示唆
2. 目標を達成するために必要な教育的経験を明確にする
3. 教育的経験を効果的に組織する
4. 目標が達成されているかどうかを評価する

◎ 目標を明確に位置づける
◎ 目標と照らし合わせて評価を行う

目標は、内容+行動（精神的、身体的、情緒的側面も含む）
⇒ブルーム「教育目標の分類学(タクソノミー)」

▶ その後の展開と現在の動向…能力(コンピテンシー)への注目

▶ 14

工学的アプローチと羅生門的アプローチ

▶ カリキュラム開発に関する国際セミナー(文部省・OECD-CERI、1967年)

一般的手続き

工学的接近 (technological approach)	羅生門的接近 (rashomon approach)
一般的目標 ↓ 特殊目標 ↓ 「行動的目標」 ↓ 教材 ↓ 教授・学習課程 ↓ 行動的目標に照らした評価	一般的目標 ↓ 創造的教授・学習活動 ↓ 記述 ↓ 一般的目標に照らした判断評価

工学的アプローチと羅生門的アプローチ

評価と研究

工学的接近	羅生門的接近
目標に準拠した評価 (goal-reference evaluation)	目標にとらわれない評価 (goal-free evaluation)
一般的な評価枠組 (general schema)	様々な視点 (various perspectives)
心理測定のテスト (psychometric tests)	常識的記述 (common sense description)
標本抽出法 (sampling method)	事例法 (case method)

▶

工学的アプローチと羅生門的アプローチ

目標、教材、教授・学習過程

	工学的接近	羅生門的接近
目標	「行動的目標を」 「特殊的であれ」	「非行動的目標を」 「一般的であれ」
教材	教材のプールからサンプルし、 計画的に配置せよ	教授学習過程の中で教材の価値 を発見せよ
教授学習過程	既定のコースをたどる	即興を重視する
強調点	教材の精選、配列	教員養成

▶

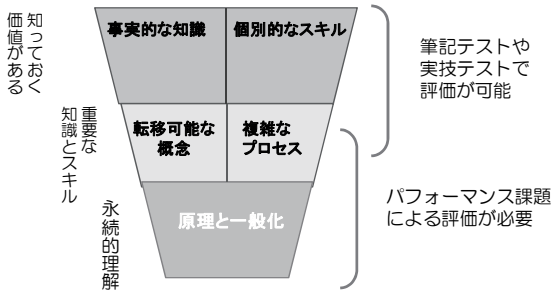
「逆向き設計」論 (Wiggins, 1998)

- ① 求められている教育の結果(教育目標)を決める
- ② その結果がもたらされたことを証明できる証拠(評価方法)を考える
- ③ そのような証拠が生み出されるような学習経験や教授方法を考える。

▶ 細かい知識の大部分を忘れてしまった後にも残ってほしいと教師が願う「永続的な理解」に焦点を合わせ、それを育み評価するパフォーマンス課題を軸に単元を設計。

▶ 18

「知の構造」と評価方法の対応



様々な評価方法



実践例：科学技術と人間の生活 (中3・理科)

単元のねらい
エネルギーに関する観察・実験を通して、日常生活や社会では様々なエネルギーの変換を利用していることに気づき、エネルギー資源の利用や科学技術の発展と人間生活とのかわりについて認識を深める。…科学技術の利用の在り方について多面的、総合的に捉え、限りあるエネルギー資源を有効に利用することの重要性を認識する

<パフォーマンス課題>
現在、日本には多くのテーマパークが存在しています。中でも派手な動きをするアトラクションが人気ですが、昨今のエネルギー事情や地球環境問題を考えると、できるだけ環境に優しいアトラクションが望まれています。そこで、アトラクションを動かしているエネルギーを探り、そのエネルギーの損失を少なくしたり、エネルギーを再利用したりする工夫を加え、自分の考える環境に優しいアトラクションを考案し、提案しなさい。

時	学習内容と活動
1.2	【エネルギー資源、電気エネルギー】 電気エネルギーに関する実験や調べ学習を通して、電気エネルギーの働きに興味をもつ
3	【身の周りのエネルギー】 電気エネルギー以外のエネルギー(光、熱、音など)を身の周りから見いだす
4-6	【エネルギーの移り変わり】 様々なエネルギー変換に関する実験を通して、エネルギーは姿を変え、相互に移り変わることを見いだす
7.8	【エネルギーの保存、再生可能エネルギー】 ←パフォーマンス課題
9.10	【エネルギーの利用】LED電球の優位性を考える (パフォーマンス課題)

評価規準：自然界でのエネルギーの循環を多様な視点でとらえる

- ▶ アトラクションを動かしているエネルギーを見つけ出し、そのエネルギーは様々な形のエネルギーに変換され、自然界に存在し、循環していることを指摘している
- ▶ 摩擦による熱エネルギーや音エネルギーの発生に気づき、エネルギーの損失(無駄)を生み出していることを指摘している
- ▶ アトラクションの動き(回転や落下)を利用して、新たにエネルギーを作り出している。エネルギーの再生利用を考えている。
- ▶ 太陽光や風力などの自然エネルギーを積極的に利用している
- ▶ 水素エンジンや燃料電池などの新しいエネルギーを利用して

生徒の作品



ご清聴ありがとうございました



本所 恵
honjo@staff.kanazawa-u.ac.jp

参考文献

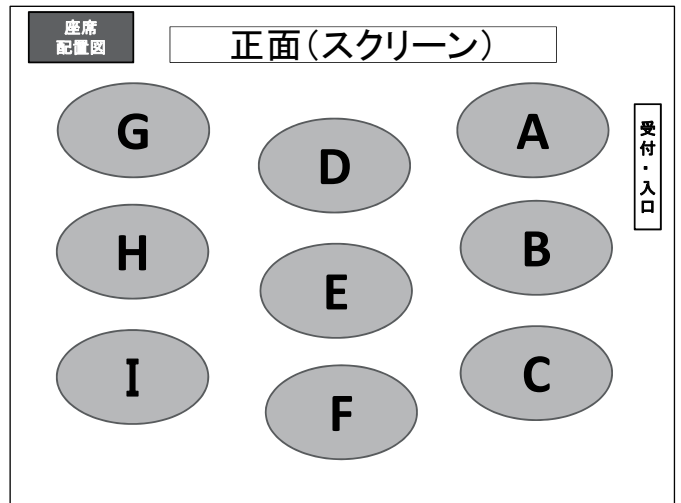
- ▶ 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵『新しい時代の教育課程(第3版)』有斐閣、2011年。
- ▶ 田中耕治編『よくわかる教育課程(やわらかアカデミズム〈わかる〉シリーズ)』ミネルヴァ書房、2011年。
- ▶ 田中耕治編『パフォーマンス評価 思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい、2011年。
- ▶ 松下佳代「カリキュラム研究の現在」『教育学研究』74(4)、2007年。
- ▶ G.ウィギンズ、J.マクタイ著、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計―「逆向き設計」の理論と方法』日本標準、2012年。

▶ 25

■資料「大学共創フォーラム2013 概要資料」(林 透・河島 広幸)

大学共創フォーラム2013

オリエンテーション資料
2013年12月21日(土)12:30~17:00
@金沢学生のまち市民交流館



大学共創フォーラム2013

みんなで大学教育について語ろう!
Part 2
—授業デザインの共創—

みんなで創った授業が、あしたの大学教育を新しくする。それが大学共創です。「教える」と「学ぶ」、二つの視点から何が見えてくるでしょうか。

会場：金沢学生のまち市民交流館 交流ホール
(石川県金沢市片町2-5-17)
URL：
<http://www4.city.kanazawa.lg.jp/22050/shiminkouryukan/>
日時：12月21日(土)12:30~17:00 (受付開始 12:00)
対象：大学教職員、大学生・大学院生、一般の方
定員：40名

主催：大学共創プロジェクト
金沢大学 大学教育開発・支援センター
富山大学 大学教育支援センター
福井大学 高等教育推進センター
北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター
大学コンソーシアム石川

共催：大学行政管理学会中部・北陸地区研究会

大学共創宣言

大学共創プロジェクト
金沢大学大学教育開発・支援センター
富山大学大学教育支援センター
福井大学高等教育推進センター
北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター

大学(大学教育)は、知のオアシスであり、社会の羅針盤であってほしい。大学(大学教育)が秘めるポテンシャルは計り知れず、そのポテンシャルを感じ取るには、教員・職員・学生(教職学)、さらには市民と一緒に議論する「共創の場」が必要ではないか。

我々、大学共創プロジェクトでは、共創の定義を以下のように規定したい。

①教員・職員・学生が、協働という形式を超えて、大学教育を共に創り上げるということ。
②大学間連携により、個々の組織文化を超えて、大学教育に関する共通の課題について考え、課題解決や新たな方向性を見出していくこと。

3

趣 旨

大学教育について、教員・職員・学生、そして、市民が一緒になって考える共創の場づくりを目指します。

「今、求められる人材像」について考えた昨年度に続き、今年度は、教員・職員・学生、そして、市民が一緒になって、授業デザインに取り組みます。

新たな授業の共創を楽しみながら、授業デザインやカリキュラムデザインに関する理解を深めることを目的とします。

4

内 容

知識創造の技法を使ったグループワークを通して「シラバス作成」を行います。

「教える」と「学ぶ」、二つの歯車を上手くかみ合わせるために、教える側(教員)と学ぶ側(学生)の視点だけではなく、職員や市民の方の意見を取り入れながら、みんなで授業デザインについて考え、シラバスを創り上げます。

さあ、「共創の場」で新しい気づきを感じ、自らのエネルギーに変えよう。

5

グループワーク

「みんなでシラバスを作成してみよう！
～授業デザインの共創～」

6

グループワークの流れ

グループワーク＝2時間30分(13:30～16:00)

- ①オリエンテーション＝5分
- ②【個人ワーク】＝25分
自己紹介シートの作成(5分)、発表(3分×5～6名)
- ③【グループワーク①】＝30分
授業の主題
- ④【グループワーク②】＝30分
学習目標
- ⑤【グループワーク③】＝30分
授業計画・授業外学習・成績評価方法
- ⑥【シラバス作成】＝30分

7

シラバスづくりのストーリー

- みなさんは、共創大学のメンバーです。
- 共創大学では、教員・職員・学生と一般の方がいっしょになって授業を創ります。
- 各手順の作業時間は限られていますので、みんな協力して、効率的に作業を進めてください。
- 限られた時間ですが、たくさんのアイデアを出し合って、キラリと光るものを発見し、伸ばしてください。



8

シラバスづくりの注意点

- ✓ シラバスは授業の設計図です。しばしばブラックボックスになりがちな授業をシラバスによって明瞭・明快なものにしてください。
- ✓ 学習目標は、配布資料の「3領域の行為動詞」を参考にして「何ができるようになるのか」を明確にしてください。
- ✓ 配布資料に、いくつか「学び」のあり方を載せておりますので参考にしてください。



9

ワークをはじめる前に

- 思いついたアイデアは、どんどんポストイット(付箋)に書き込んで貼って行ってください。
- 質より量です。
- 自ら積極的に発言するとともに、仲間のことばにも真剣に耳を傾けてください。
- グループでは、ニックネームでお互いを呼び合い、気軽な雰囲気でお話し合しましょう。

10

【個人ワーク】

1. 【自己紹介シート】にニックネームを書いてください。
2. “あったらいいなこんな授業科目”は、これまで大学になかったような科目を考えてみてください。
3. “あったらいいなこんな授業科目”に係るキーワードを3つ挙げてください。そして、その授業を通してできるようになることを学習目標に書いてください。
4. 【自己紹介シート】に記入し、グループ内で発表してください(発表の時間は1人当たり3分程度)。

11

【グループワーク①】 授業の主題(30分)

※ここから「シラバス(作業用)」を使います。

- それぞれの【自己紹介シート】を参考にしながら、授業の主題を構成してください。
- アイデアの広げ方、収束の仕方などを工夫して時間内に作業を終えてください。

12

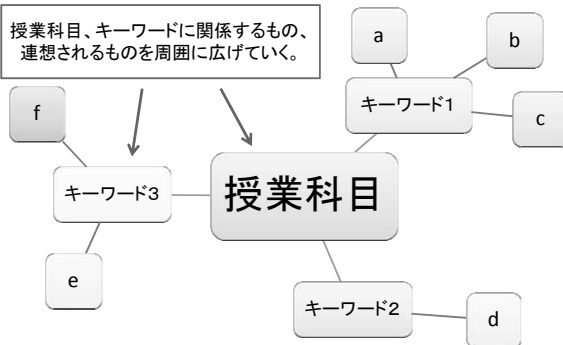
【グループワーク②】 学習目標(30分)

- それぞれの【自己紹介シート】を参考にしながら、学習目標を構成してください。
- アイデアの広げ方、収束の仕方などを工夫して時間内に作業を終えてください。

13

アイデアの広げ方の例

授業科目、キーワードに関係するもの、連想されるものを周囲に広げていく。



14

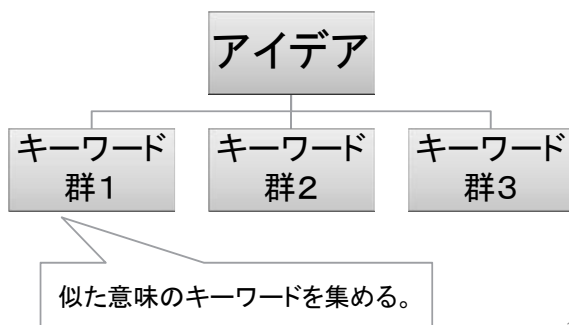
アイデアの広げ方の例

	キーワード1	キーワード2	キーワード3
キーワード4	アイデア1		
キーワード5	アイデア2		
キーワード6			

キーワード1 × キーワード4で新しいアイデアを生み出す。

15

アイデア収束の仕方の例



16

【グループワーク③】 授業計画・授業時間外学習・ 成績評価方法

- 残りの時間を使って(約30分)、「授業計画」、「授業時間外の学習方法」、「成績評価方法」について、アイデアを出し合ってください。

17

【シラバス作成】

※ ここからは「シラバス(発表用)」を使います。

1. 授業科目名を書き込んでください。
2. みなさんで創った授業にとって最適と考えられる、授業の形態・規模を書き込んでください。
3. これまでの成果(主題、学習目標、計画、授業外学習、評価)をまとめて「シラバス(発表用)」に書き込んでください。
4. 「お疲れ様です！」とメンバーの健闘を称えあい、全体発表に備えてください。

18

シラバス発表タイム

- 各グループで創り上げたシラバスについて発表していただきます。
- 各グループの発表時間は、3分です。
- 授業デザインの「共創」の醍醐味を参加者全員で共有するクライマックスです。

19

おわりに

所属・立場・年代を超えた対話を通して見えてきた
新たな気づきがあったでしょうか！

授業デザインの「共創」を体感できたでしょうか！

- グループワークを通じた仲間との共有
- リフレクションシートに刻み込んだ明日への誓い

さあ、一歩前に踏み出してみましよう！！

20



THANK YOU !



21

■資料「大学共創フォーラム 2013 グループワーク用参照資料」（河島 広幸）

大学共創フォーラム 2013

グループワーク用参照資料
(学習目標を表わす行為動詞と学び方の形態)

学習目標を表わす 行為動詞群¹

1 Bloom, B.S., (Ed.). (1956) Taxonomy of educational objectives: *The classification of educational goals: Handbook I, cognitive domain*. New York: Longman.
荒木晶子(2011)「大人数教室での効果的な授業運営方法」『第1回新任教員研修セミナー 配布資料』八王子セミナーハウス

2

知識領域の行為動詞

- ・ 列記する
- ・ 関係づける
- ・ 使用する
- ・ 列挙する
- ・ 解釈する
- ・ 応用する
- ・ 述べる
- ・ 予測する
- ・ 適用する
- ・ 説明する
- ・ 選択する
- ・ 演繹する
- ・ 分類する
- ・ 同定する
- ・ 批判する
- ・ 比較する
- ・ 推論する
- ・ 評価する
- ・ 例を挙げる
- ・ 公式化する
- ・ 暗唱する
- ・ 類別する
- ・ 一般化する

3

技能領域の行為動詞

- ・ 模倣する
- ・ 準備する
- ・ 削る
- ・ 工夫する
- ・ 測定する
- ・ 切る
- ・ 実施する
- ・ 調整する
- ・ 話す
- ・ 行う
- ・ 配合する
- ・ 聞く
- ・ 創造する
- ・ 描く
- ・ 書く
- ・ 操作する
- ・ 運転する
- ・ 読む
- ・ 動かす
- ・ 修理する
- ・ 調べる
- ・ 防ぐ

4

態度領域の行為動詞

- ・ 尋ねる
- ・ 見せる
- ・ 助ける
- ・ (感情を)表現する
- ・ 討議する
- ・ 参加する
- ・ 感じる
- ・ 反応する
- ・ 寄与する
- ・ 応える
- ・ 協調する
- ・ 配慮する
- ・ (興味・関心・態度を)示す
- ・ 相談する

5

大学教育の質的な転換

6

平成24年度 中央教育審議会
 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
 ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
 (答申)

学士課程教育はキャンパスの中だけで完結するものではなく、サービス・ラーニング、インターンシップ、社会体験活動や留学経験等は、学生の学修への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つ(p. 24.)。

7

アクティブ・ラーニング

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である(p. 37.)。

8

サービス・ラーニング(1)

教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム(p. 38.)。

サービス・ラーニングは次の効果が期待できる。

9

サービス・ラーニング(2)

- 専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化(座学の実学化)。
- 将来の職業について考える機会の付与
- 自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上

(p.38.)

10

現在注目されている様々な「学び方」

11

● 学生参加型授業

コメント・質問を書かせる、授業の最初や最後に小テストやミニレポートを行い理解度を確認する、クリッカーを使用するなどして行う授業。

溝上慎一(2010)「アクティブ・ラーニングとは」『河合塾ガイドライン』pp. 44-51.

● コラボレーティブ・ラーニング(協同学習)

学習者同士の学び合いによって、学習意欲が高めることができる学習方法。

ジョンソン、D.W.、ジョンソン、R.T.、& スミス、K.A.(著)関田一彦(監訳)(2001)「学生参加型の大学授業—共同学習への実践ガイド—」玉川大学出版

12

● Problem-Based Learning (PBL)

学習者自らが答えの無い問題を自分で考え、他者との関わりを通して何か新しいものを生み出していく積極的な学習。

安西裕一郎(2013)『『主体性』を身につける』『大学時報』349, pp. 30-37

● Project-Based Learning

企業や団体、その他個人などと共同で開発された授業。学習者は、自身のコミュニケーション、チームワーク、社会性に関する能力の伸長を実感することができる。

東山高久(2013)「企業と大学が協同し、学びに関わることで学生の主体性は引き出されたか『Future Skills Project』の取り組み」『大学時報』349, pp. 38-45.

山田和人(2013)「PBLの学びを最大値にするために 同志社大学プロジェクト科目の場合に即して」『大学時報』349, pp. 46-51.

13

企業と大学(学生)で取り組んだプロジェクトの例

サントリーホールディングス(株)	あなたは人事部から「人材育成革新プロジェクト」のメンバーとして指名されました。社会人・企業人に求められるものを考察し、新入社員の育成について、具体的な施策を提案しなさい。
(株)資生堂	あなたは、SEA BREEZEの担当者です。競合ブランドから首位を奪い、NO.1のポジションを盤石化するためのブランド育成戦略を提案しなさい。
野村證券(株)	あなたは野村證券の社員です、より良い社会を実現するために魅力的と考える投資対象を決め、その根拠を示しなさい。

東山高久(2013)「企業と大学が協同し、学びに関わることで学生の主体性は引き出されたか『Future Skills Project』の取り組み」『大学時報』349, pp. 38-45.

14

● 反転授業

講義ビデオを事前に視聴しておき、教室内では、質問や討議、課題・問題の解決を行う。予習とアクティブ・ラーニング(能動的学習)に重きを置いた学習法。

● MOOCs(大規模オープン・オンライン・コース)

オンラインで大学の講義が受けられるサービスで、Coursera、Edx、Udacityが有名。ハーバード大学などの有名大学の講義を受講でき、修了証が発行される。一部の大学(海外)では修了証を単位として認める動きが出てきている。

15

● 国際教養大学(AIU) 国際教養学部

2004年に開学した新しい公立大学。特徴的な教育プログラムと学生と専任教員の比率が15:1という比較的少人数教育が行われている。非常に高い就職率(有名企業を含む)などで話題の大学。

● 英語で行う授業。

● 1年間の寮生活と留学が義務付けられている。

● Project-Based Learning科目が充実しており、アメリカの大学教員と協働で開発した「日米協働課題解決型プロジェクト」科目がある。

国際教養大学ホームページ <http://web.aiu.ac.jp/> 2013年11月21日アクセス

16

■資料「自己紹介シート」「シラバス（作業用）」「シラバス（発表用）」

オモテ

自己紹介シート

ニックネーム：

お題 “あったらいいなこんな授業科目”

()

(1) 授業の主題（キーワード）

-
-
-

(2) 授業の学習目標（授業を通して修得できる知識・技能・態度）

-
-
-

ウラ

リフレクションシート

- 明日からの教えること、学ぶこと、支援することへの誓い

シラバス（作業用）

授業の主題	
学習目標	
授業計画	
授業時間外の 学習方法	
成績評価方法	

シラバス（発表用）

グループ名 _____

リーダー _____

授業科目名	
授業の主題	
授業形態 授業規模	
学習目標	
授業計画	
授業時間外の 学習方法	
成績評価方法	

■資料「グループワーク発表シラバス概要一覧」

大学共創フォーラム 2013 グループワーク発表シラバス概要一覧

グループ名・リーダー	シラバス内容
<p>A グループ「ゴボウに咲く」 リーダー：くぼっち</p>	<p>【授業科目名】：「あなたのためになる社会実践演習」 【授業の主題】： ●活動・体験を通して社会の仕組みを知る。 ●既存の学問の限界を知る。 【授業形態・授業規模】：フィールドワーク・討論，20～25名 【学習目標】： ●問題発見力と問題解決力・企画力 ●効果的な情報収集ができる。 ●人々と協力しながら楽しむことができる。 【授業計画】： ①フィールドワーク⇒中間プレゼン⇒②フィールドワーク⇒批判的討論 【授業時間外の学習方法】：反転授業 【成績評価方法】： ●教員が評価するのは中間プレゼンのみ。 ●フィールドワーク関係者による評価 ●学生間評価（批判的討論）</p>
<p>B グループ「BALM」 リーダー：おつつ&うっきー</p>	<p>【授業科目名】：「Collaborative Learning for School Spirit Promotion （母校愛向上の為の協働学習）」 【授業の主題】： ●英語での大学プロモーションビデオ作成 【授業形態・授業規模】：グループワーク，30名程度 【学習目標】： ●自分たちの母校と地域を英語で伝える。 ●チームとして協働作業を行うことができる。 ●仲間意識を高めることができる。 【授業計画】： 知識を得る⇒情報を集める⇒PV作成 【授業時間外の学習方法】：文献調査，フィールド調査，インタビュー 【成績評価方法】： ●PVの評価 ●自己評価</p>

<p>C グループ「Ucchi」 リーダー：うっちー</p>	<p>【授業科目名】：「自己を知り語り創造する」 【授業の主題】： ● 粹を出す力 ● 問う力 ● 集団と自分 【授業形態・授業規模】：講義・演習，20名 【学習目標】： ● 他人の意見を比較し，人格を理解した上で批判し述べるができる。 ● 視点を変えて，新たな疑問を創造することができる。 ● 自分の事を客観的に説明することができる。 【授業計画】： 「知る」方法を知る⇒他人を知る⇒自分を知る 様々な思考法を学ぶ（論理，批判，創造） 正しいディベートの実践 【授業時間外の学習方法】：日常的に思考法の実践 【成績評価方法】： ● 自己分析の変化（初回，最終回） ● 他者分析に関するレポート</p>
<p>D グループ「ACI48」 リーダー：きりん</p>	<p>【授業科目名】：「歩いて行こう小さくて深い異文化学習」 【授業の主題】： ● 地域の人々を知る。 ● 自分と異なる属性の人々の世界を知る。 ● 傾聴及び伝達 【授業形態・授業規模】：フィールドワーク（2コマ連続，4単位），48名 【学習目標】： ● 地域の中で自分の存在価値を知ることができる。 ● よく聞くこと，よく聞き出すことができる。 ● 人に頼る（グーグルマップを使わずに目的地へ）。 ● 足元を見て，相手の立場に立つことができる。 【授業計画】： 1～4回目 班分け，訪問先決め，アポ取り，イントロ（科目説明） 5～14回目 フィールドワーク （例 ろう学校，病院，介護施設，和菓子屋，原発，他大学，商店） 15回目 プレゼンテーション，訪問先の講師を招く，ユーストリーム配信， コミュニティチャンネル 【授業時間外の学習方法】：どこに行くか考えてくる， あらかじめ現地に行く， もう一度行く（プレゼンテーション前） 【成績評価方法】： ● プレゼンテーション 50% ● 聞き書き記録 50% ※訪問先に提案できたら，+20とします。</p>

<p>E グループ 「マジカル★ピアツア」 リーダー：ミコウ</p>	<p>【授業科目名】：「まちとあそぶ」 【授業の主題】： ●まちとあそぶという視点から、まちについて自分の関心のあるテーマを見つけ、フィールドワーク、グループ学習、プレゼンテーションを通して、より理解を深め、専門領域へとつながる学習をする。 【授業形態・授業規模】：講義・演習・フィールドワーク，50名以内 【学習目標】： ●自分の住んでいる、まちのよさを知ることができる。また知ったことをプレゼン等で発信できる。 ●まちを構成する多様な要素と自分の専門領域を関連づけることができる。 【授業計画】： 全15回 1 ガイダンス，2 ゲストスピーカーによる講義， 3 グループづくり・テーマ設定，4 フィールドワーク， 5 プレゼンテーション，6 まとめ 【授業時間外の学習方法】：テーマ設定のための自己学習及びグループ学習 【成績評価方法】： ●プレゼンテーション（グループ） ●ポスターセッション（個人） ●レポート ●事前事後の自己評価，事後の他己評価</p>
<p>F グループ「F6」 リーダー：ミナミ</p>	<p>【授業科目名】：「もしも法学生が看護したら・・・」 【授業の主題】： ●他者の力を利用した潜在力の発掘 【授業形態・授業規模】：多人数によるアクティブラーニング 【学習目標】： ●異分野からの知的刺激を活用できる。 ●コミュニケーション能力（発信力，受信力） ●分析力，評価力を高める。 【授業計画】：休み中の集中講義（学生発表中心） 【授業時間外の学習方法】：通常期にICTを活用（LINE等SNSの活用） 【成績評価方法】： ●学生の相互評価を重視（他専攻の学生を含む） ●教員評価も併用</p>

<p>G グループ「Escape!」 リーダー：りょうま</p>	<p>【授業科目名】：「Enjoy Campus」 【授業の主題】： ●学生が主体となって、 大学内でのイベントを楽しみながら企画運営をする。 【授業形態・授業規模】：実習，35～40名 【学習目標】： ●主体的に自分のアイデアを説明できる。 ●新しいイベントを創造することができる。 ●自己表現するために、積極的に他者と協調することができる。 【授業計画】： 前半 ①去年の履修者の発表，②事例紹介，③班分け 中間 ①班企画を考える，②進捗状況を共有&コメント， ③学生によるプレ実行（「逃走中」） 後半 ①地域住民との実行，②報告会 【授業時間外の学習方法】：企画準備学習，地域との調整作業 【成績評価方法】： ●企画貢献度 ●報告成果物 ●地域住民満足度</p>
<p>H グループ「ハッピー」 リーダー：まみ</p>	<p>【授業科目名】：「自分デザイン学」 【授業の主題】： ●幸せでやりがいのある人生をデザインする。 ●基本的能力を身につける。 【授業形態・授業規模】：グループワーク（講義はほぼなし）， 最大40名くらい 【学習目標】： ●人脈を作る。 ●コミュニケーション力を高める。 ●自分自身の目標を設定する。 【授業計画】： ●幸せになるためのテーマごとに，グループを作る。 ●目標を設定し，プランを立てる。 ●クロスセッション，発表会 【授業時間外の学習方法】：授業外学習がメイン，自分のテーマの調査， プランの実践 【成績評価方法】： ●学生間の相互評価 40% ●教員による作成資料・レポート評価 40% ●卒業生によるプレゼンテーション評価 20%</p>

<p>I グループ「I♥urasekai」 リーダー：ペーちゃん・しょうへい</p>	<p>【授業科目名】：「裏の世界」 【授業の主題】： ●ダマされない生き方を身につける。 ●身近なテーマや素材を使って、本質を見る。 【授業形態・授業規模】：演習（1，2年次），25名程度（5名/グループ×5） 【学習目標】： ●知識や情報と現実の比較ができる。 ●状況に合わせた行動ができる。 【授業計画】： 裏ユニット（×2～3回） 1 オリエンテーション，2 座学・ゲストスピーカー， 3 フィールドワーク事前，4 フィールドワーク実習，5 発表 【授業時間外の学習方法】：グループワーク（学生同士違う学年）， 図書館などでの情報収集， 座学での事前事後学習 【成績評価方法】： ●質的評価，パフォーマンス評価，自己評価 ●従来型テスト・・・知識（座学分野）</p>
---	---

■資料「グループワーク発表シラバス」(参加者一同)

シラバス(発表用)

グループ名 ゴボウに咲く
リーダー くぼうち

授業科目名	あなたのためになる社会実践学習
授業の主題	・活動・体験を通して 社会の仕組みを知り ・既存の学問の限界を知る
授業形態 授業規模	フィールドワーク + 討論 20~25名
学習目標	・問題発見力と問題解決力・企画力 ・効果的な情報収集ができる ・人と協力しながら楽しむことができる
授業計画	<p>フィールドワーク① → 中間プレゼン → フィールドワーク② → 批判的討論</p> <p>フィールドワーク①: 音楽を通じたまち歩きイベント、地酒を介したコミュニケーション、コニヤコニヤ、(田舎)の歴史、幅広い年齢層の交流、知識の共有、企画・企画</p> <p>フィールドワーク②: フィールドワークを通して既存の学問の限界について議論する</p>
授業時間外の学習方法	反転授業
成績評価方法	・教員が評価するのは中間プレゼンのみ ・フィールドワーク関係者による評価 ・学生間互評(批判的討論)

シラバス(発表用)

グループ名 BALM
リーダー あつとつき

授業科目名	Collaborative Learning for School Spirit Promotion (母校愛向上のための協働学習)
授業の主題	英語での大学プレゼンテーション作成
授業形態 授業規模	グループワーク 30名程度
学習目標	・自分たちの母校と地域を英語で伝える。 ・チームとして共同作業を行うことができる。 ・仲間意識を高めることができる。
授業計画	<p>知識を得る → 情報集める → PV作成</p> <p>可成り地帯、期待、HP PV、原稿作成</p> <p>場所の歴史的理解、地域観察、資料を英語表現の学習</p> <p>可成り地帯、歴史</p>
授業時間外の学習方法	調査・文献調査・インタビュー ・フィールド調査
成績評価方法	・PVの評価 ・自己評価

シラバス(発表用)

グループ名 ucchi
リーダー ラッチー

授業科目名	自己を知り語り創造する
授業の主題	枠を出る力・問う力 ・集団と自分
授業形態 授業規模	講義・演習 20人
学習目標	・4人の意見を比較し、人格を理解した上で批判し述べる ・視点を変えて新たな疑問を創造することができ ・自分の事を客観的に説明することができる
授業計画	・「知る」方法を知る → 他人を知る → 自分を知る ・さまざまな思考法を学ぶ(論理批判創造) ・正しいディベートの実践
授業時間外の学習方法	・日常的に思考法の実践
成績評価方法	・自己分析の変化(初回・最終回) ・他者分析に関するレポート

シラバス(発表用)

グループ名 ACI48
リーダー きりん

授業科目名	歩いて行こう 小さくて深い異文化学習
授業の主題	① 地域の人々を知る ② 自分と異なる属性の人達の世界を知る ③ 傾聴及び伝達
授業形態 授業規模	フィールドワーク 2コマ連続 4単位 48名
学習目標	・地域の中で自分の存在価値を知ることができる。 ・よく聞くこと、よく聞き出すことができる。 ・人に頼る。(テグスマップを使わずに目的地へ) ・足元を見て相手の立場に立つことができる。
授業計画	<p>1~4回目 5~14回目 15回目</p> <p>・班分け フィールドワーク プレゼンテーション</p> <p>・訪問先決め 例: 訪問先の講師を招く</p> <p>・アポ取り 例: 学校、病院、訪問先の講師を招く</p> <p>・イントロ(科目説明) 例: 介護施設、和菓子屋 コーストリム</p> <p>・原稿 例: 配信</p> <p>・他大学 例: コミュニティチャンネル</p> <p>・商店</p>
授業時間外の学習方法	・どこに行くか考えてくる。 ・あらかじめ現地に行く。 ・もう一度行く(プレゼンテーション前)。
成績評価方法	プレゼンテーション 50% 聞き書き記録 50% ※訪問先に提案できたら、+20%とします。

シラバス(発表用)

グループ名 マジカル★ヒーローズ
リーダー ミコウ

授業科目名	まちとあそぶ
授業の主題	●まちとあそぶという視点からまちについて自分の関心のあるテーマを見つけ、フィールドワークグループ学習・プレゼンテーションを通してより理解を深め専門領域へとつながる学習をする。
授業形態	講義・演習・フィールドワーク
授業規模	定員 50名以内
学習目標	自分の住んでいるまちのよさを知ることができる。また、知ったことをプレゼン等で発信できる。まちを構成する多様な要素と自分の専門領域を関連づけることができる。
授業計画	全15回 1. ガイダンス 2. ゲストスピーカーによる講義 3. グループ作り、テーマ設定 4. フィールドワーク 5. プレゼンテーション 6. まとめ
授業時間外の学習方法	テーマ設定のための自己学習及びグループ学習
成績評価方法	プレゼンテーション(グループ) ポスターセッション(個人)レポート 事前事後の自己評価 事後の他己評価

シラバス(発表用)

グループ名 F⁶
リーダー ミナミ

授業科目名	もしも 法学生が看護したら...
授業の主題	・他者の力を利用した潜在力の発掘
授業形態	・多人数によるアクティブラーニング
授業規模	
学習目標	・異分野からの知的刺激も活用できる ・コミュニケーション能力(発信力・受信力) ・分析力・評価力を高める
授業計画	・休み中の集中講義(学生発表中心)
授業時間外の学習方法	●通常期にICTを活用(LINE等SNSの活用)
成績評価方法	・学生の相互評価を重視(他専攻の評論) ・教員評価も併用

シラバス(発表用)

グループ名 Escape!
リーダー りょうま

授業科目名	Enjoy Campus
授業の主題	学生が主体となり、大学内でのイベントを楽しみながら企画運営をする。
授業形態	実習
授業規模	35～40人
学習目標	・主体的に自分のアイデアを説明できる ・新しいイベントを創造することができる ・自己実現するために積極的に他者と協働することができる
授業計画	前半: ①去年の反省者の発表 ②事例紹介 ③参加 中間: ①企画案を考える ②進捗状況共有＆コメント ③学生による実行(逃走中) 後半: ①地域住民との実行 ②報告会
授業時間外の学習方法	・企画準備学習 ・地域との調整作業
成績評価方法	・企画貢献度 ・報告成果物 ・地域住民満足度

シラバス(発表用)

グループ名 HAWAIIへの扉
リーダー 圭司

授業科目名	自分デザイン学
授業の主題	幸せでやりがいのある人生をデザインする 基本的な能力を身につける
授業形態	グループワーク(講義はほぼなし)
授業規模	最大40名くらい
学習目標	人脈作る。 コミュニケーション力を高める。 自分自身の目標を設定する。
授業計画	幸せに生きるためのテーマごとに、グループを作る。目標を設定し、プランを立てる。 クロスセッション 発表会
授業時間外の学習方法	授業外学習がメイン。 自分のテーマの調査、プランの実践。
成績評価方法	学生間の総相互評価(40%) 教員による作成資料・レポート評価(40%) 卒業生によるプレゼンテーション評価(20%)

シラバス(発表用)

I ♥ urasekai
グループ名
リーダー名: 山崎 隆夫

授業科目名	裏の世界
授業の主題	ドラマの裏の生き方を身につける。 身近なテーマや素材を使って本質を見る。
授業形態 授業規模	演習 25名程度 (5名/グループ) (1, 2年次)
学習目標	知識や情報と現実の比較ができる。 状況に合わせて行動ができる。
授業計画	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 裏ユニット 1. オリジナル 2. 産学・カステル 3. ノーブルワーク 4. ノーブルワーク演習 5. 発表・レポート </div> × 3回 2~
授業時間外の 学習方法	・ ノーブルワーク (学生同士の交流) ・ 図書館での情報収集 ・ 座学での事前学習
成績評価方法	・ 質的評価 ・ パフォーマンス評価…… ・ 自己評価 ・ 従来型テスト…… 知識 (座学分野)

大学共創フォーラム 2013 アンケート結果

日時：平成25年12月21日（土） 12：30～17：00

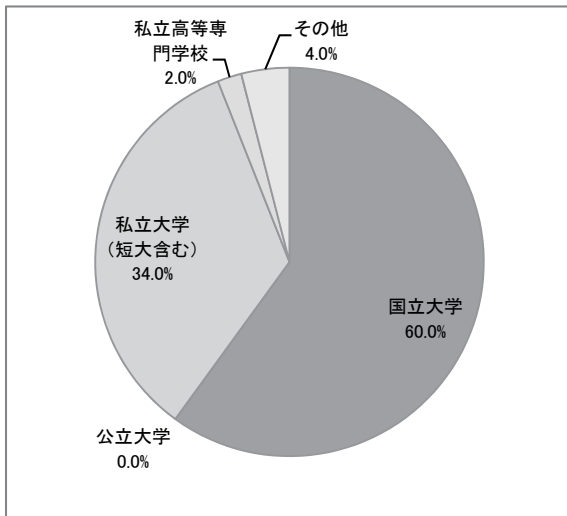
場所：金沢学生のまち市民交流館 交流ホール（和室畳の間）

出席者数：53名

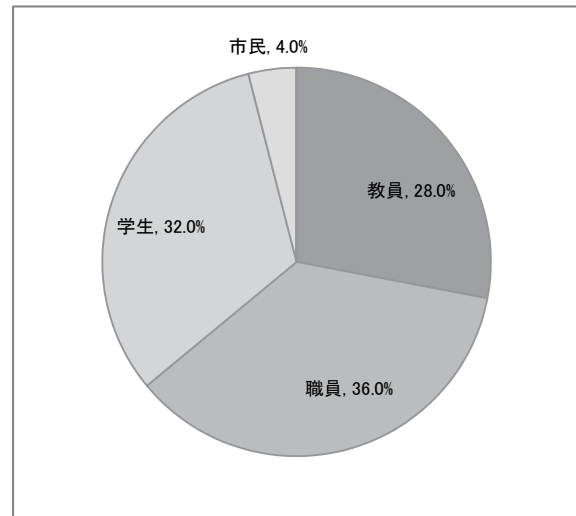
回答者数：50名（回答率：94.3%）

1. 参加者ご自身について

(1) 所属



(2) 身分

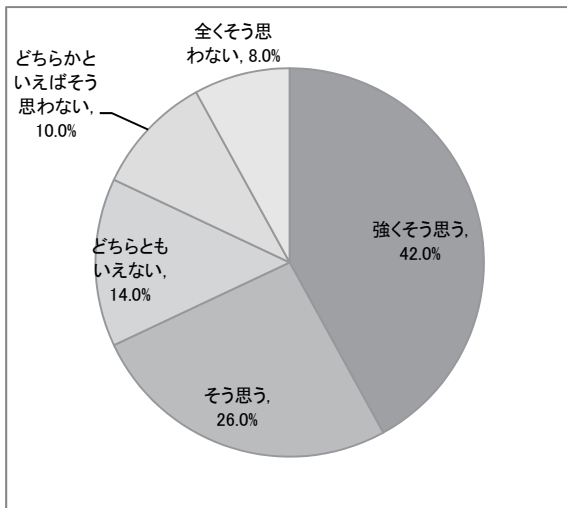


これより先の設問における回答番号の説明は次のとおり。

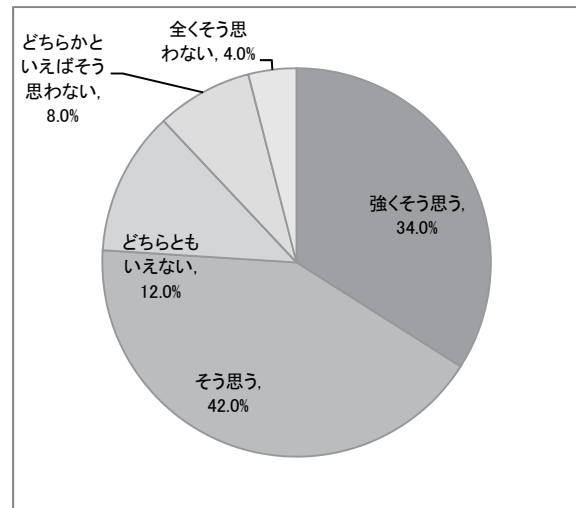
- | | |
|-------------|------------------|
| 5 強くそう思う | 4 そう思う |
| 3 どちらともいえない | 2 どちらかといえばそう思わない |
| 1 全くそう思わない | |

2. フォーラム参加について

(1) フォーラムの趣旨や内容についてある程度知った上で参加した

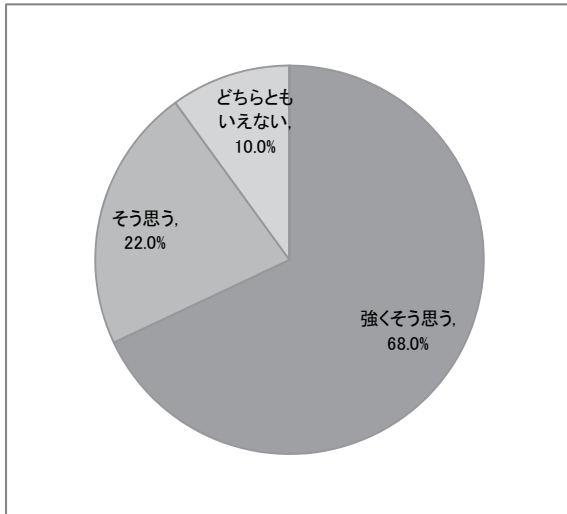


(2) 自分自身で必要性を感じて参加した

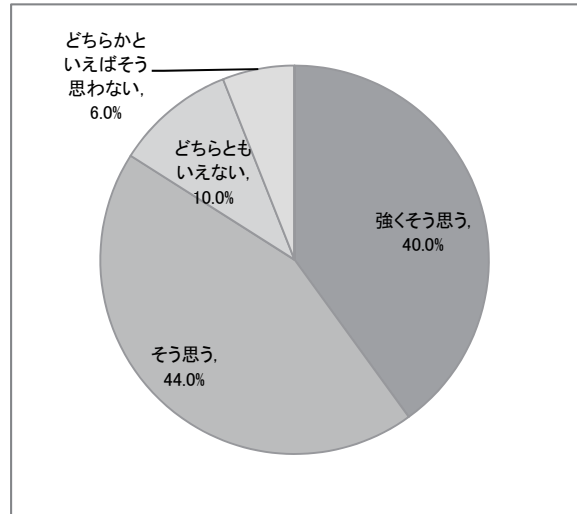


3. フォーラムについて

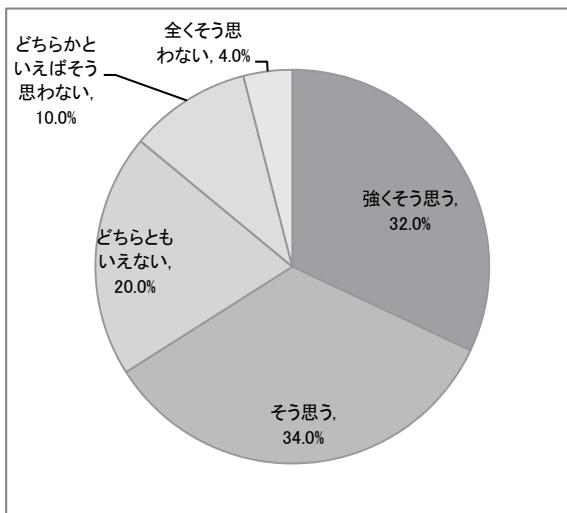
(1) 大学共創というコンセプトは大切である



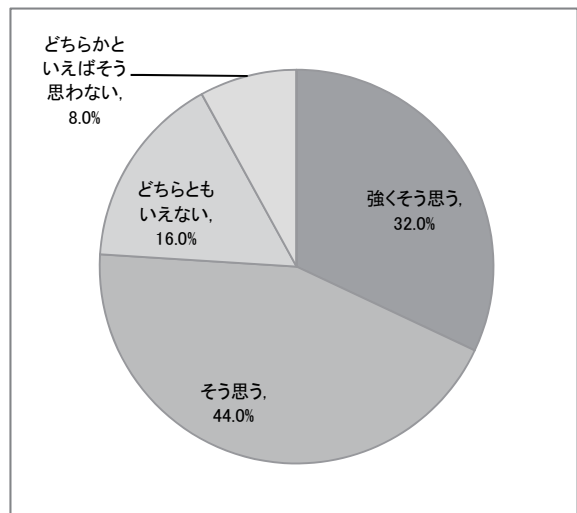
(2) フォーラムの内容はわかりやすく十分に理解できた



(3) フォーラムの時間はちょうど良い長さだった

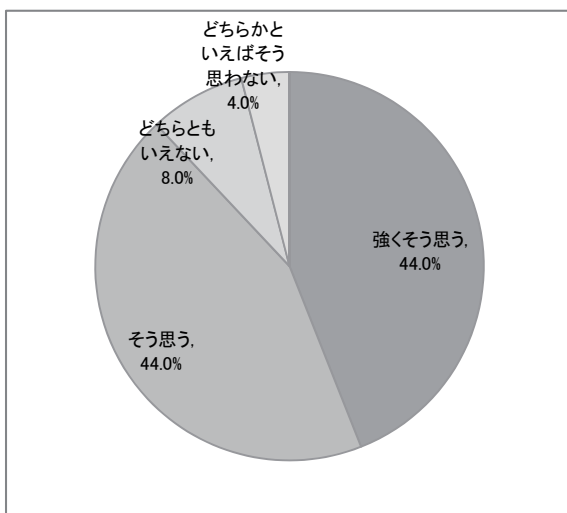


(4) フォーラム会場は快適な環境だった

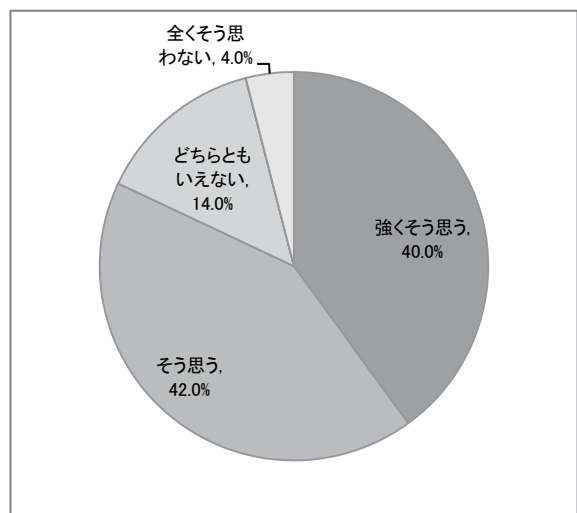


4. フォーラム全体について

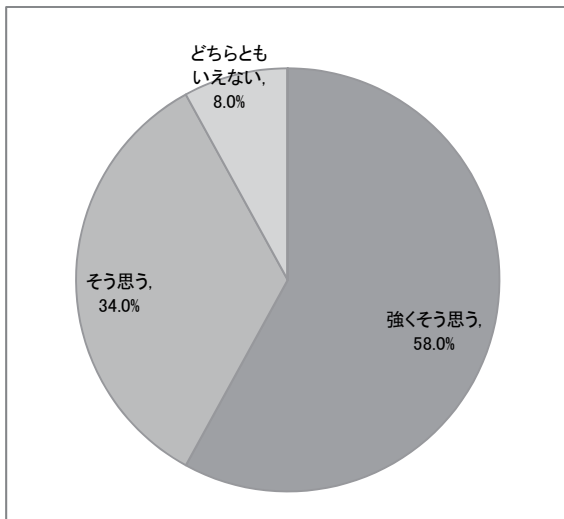
(1) 全体的に満足できるものだった



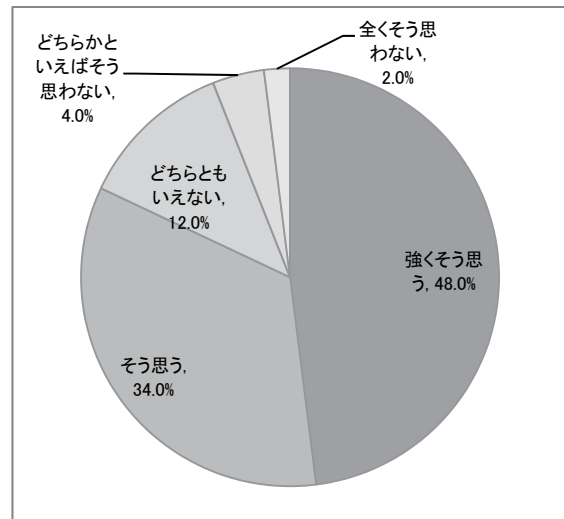
(2) 授業デザインについて理解を深めることができた



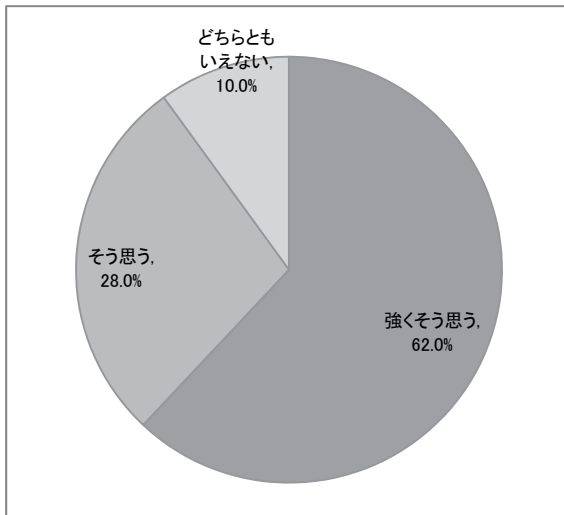
(3) グループワークを通して新しい気づきがあった



(4) 大学共創を通して、大学教育がより良くなると思う



(5) 今後もこのようなセミナーを継続していくべきだと思う



IV

おわりに

大学共創宣言

大学共創プロジェクト

金沢大学大学教育開発・支援センター

富山大学大学教育支援センター

福井大学高等教育推進センター

北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター

大学（大学教育）は、知のオアシスであり、社会の羅針盤であってほしい。大学（大学教育）が秘めるポテンシャルは計り知れず、そのポテンシャルを感じ取るには、教員・職員・学生（教職学）、さらには市民が一緒になって議論する「共創の場」が必要ではないか。

我々、大学共創プロジェクトでは、共創の定義を以下のよう
に規定したい。

- ①教員・職員・学生が、協働という形式を超えて、大学教育を共に創り上げるということ。
- ②大学間連携により、個々の組織文化を超えて、大学教育に関する共通の課題について考え、課題解決や新たな方向性を見出していくこと。

(2013年3月策定)

編集後記

はじめに、大学共創プロジェクトのメンバーと関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。また、事例調査に御協力頂いた各大学と関係者の方々に深く感謝申し上げます。大学共創フォーラムの開催にあたっては、御参加頂いた教員、職員、学生、そして市民の方々の建設的な参画がフォーラムを成功に導いたのであると確信しております。

私は、学生として本プロジェクトに参画させて頂きました。「学生を信頼し、任せる」ことをしてくださった教職員の方に対して、学生は「信頼され、任される」ようになることで、お応えしようと努力をして参りました。こうした相互信頼関係は、お互いがプロジェクトの成功を担い合うという共創関係を築くために不可欠な要素であると感じました。

末筆ながら、大学共創プロジェクトのさらなる発展と北陸の地に共創文化が根付くことを祈念し、編集後記とさせていただきます。

北陸先端科学技術大学院大学

知識科学研究科 知識科学専攻 博士前期課程

河島 広幸



<編者紹介> 林 透 (はやし とおる)

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授

北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター客員准教授

金沢大学 大学教育開発・支援センター客員研究員

(経歴)

1995年 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻修士課程修了。1996年 金沢大学庶務部庶務課に採用となり、2004年 北陸先端科学技術大学院大学総務課に異動し、2010年 北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター教員となり、2013年より現職。職務の傍ら、2007年 桜美林大学大学院国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程(通信教育課程)修了、2010年 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻(高等教育マネジメント分野)博士後期課程 単位取得満期退学、2011年 博士(教育)(名古屋大学)を取得。

専門分野は、高等教育論、大学組織論、キャリア開発論。

北陸地区国立4大学による大学共創プロジェクトの企画提案者。

<編者紹介> 河島 広幸 (かわしま ひろゆき)

北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 博士前期課程

(経歴)

2002年から米国カリフォルニア州に留学し、アメリカ史と広告を専攻。2012年 創価大学法学部卒業。2014年 北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 知識科学専攻(社会知識領域)修了見込。創価大学では、学部生代表として大学運営に参画、大学院進学後は、地域振興活動、北陸地区国立4大学による大学共創プロジェクトに参画。

修士学位論文テーマ「学生参画型大学運営のナレッジマネジメント—創価大学の事例研究—」。

TESK ライブラリー9

『大学共創プロジェクト2013 報告書』

2014年3月10日 発行

編者 林 透・河島 広幸

企画 金沢大学 大学教育開発・支援センター

富山大学 大学教育支援センター

福井大学 高等教育推進センター

北陸先端科学技術大学院大学 大学院教育イニシアティブセンター

発行者 林 透

発行所 金沢大学 大学教育開発・支援センター

〒920-1192 石川県金沢市角間町

電話 076-264-5837

FAX 076-234-4172

© Kanazawa University Research Center for Higher Education

Tertiary

Student

Support

Education

Evaluation

Kanazawa University